

敗戦後の福岡における演劇・芸能復興年表

石川 巧

敗戦直後の日本では、多くの国民が生活の困窮にあえぐ一方、戦中の国策によって統制されてきた文化や娯楽に飢えていた。また、東京をはじめとする首都圏は空襲によって甚大な被害を蒙っており、再生を果たしていくための様々な課題が山積していた。そうしたなか、福岡市では演劇・芸能・出版などの分野でいち早く復興への取り組みが始まり文化都市としての活力を蓄えていく。本年表は、そうした敗戦直後の福岡市の状況を正確に把握するために、演劇・芸能に関する公演活動、劇場関連情報、および、それらに関連する活動を中心に項目化したものである。

ただし、その多くは新聞・雑誌等の記事、広告からの採取であり、ひとつひとつの項目に関して裏付けをとることは極めて困難である（したがって、固有名詞等の表記は誤植も多々あるだろうが、基本的に雑誌・新聞掲載のママとした）。そこで、年表作成にあたって以下のような原則を設け、焦点を絞った。①敗戦直後の上演演目は可能な限り詳細に記したが映画上映などは劇場の開館および特にトピック性がある項目以外、除外している（この項目については、元情報が誤っている場合も多々あるだろう）。②「復興」をコンセプトとして項目を採取したため、昭和23年までを目安とした。③必要に応じて適宜、日本全体の演劇・芸能に関する項目や福岡の市民生活に関する項目を拾っている。④昭和21年5月に創刊された「九州演劇」（九州演劇社）は、同時代における福岡周辺の演劇・芸能に関する多くの情報を提供しているため、同誌の刊行期（現在、確認できているのは昭和23年1月に発行された「自立演劇特輯号」（第3巻第1号）までであり、「オール作品第三輯」（第3巻第2号）と「三月特別号 劇作選集」の予告が出されているものの、それぞれに関しては未刊行と考えられる）を本年表の射程とした。⑤「九州演劇」創刊以降は演劇・芸能に関する情報を項目として採取するだけでなく、重要な記事・論評に関してもその一部を採取している。

各項目の作成に関しては「西日本新聞」マイクロフィルム版および福岡市総合図書館、福岡県立図書館、九州大学所蔵の雑誌・諸文献を基礎資料としたが、それらとともに活用した先行研究に花田俊典「福岡都市圏近代文学文化史年表」（未刊行 2004年5月13日、更新版）と畑中佳恵編「福岡都市圏・復興年表」（『文学の記憶・福岡1945』福岡市文学館、2005・7所収）がある。両年表からは、同時代の福岡における演劇・芸能関係をめぐる様々なトピックを教えられ、項目としてとりあげることができた。具体的にいえば、前者は福岡の復興期における文化事業等に関して、後者は演劇上演記録と映画情報に関して数多くのことを教えられた。それぞれの労作に対して心より感謝申し上げるとともに、特に花田俊典作成の「福岡都市圏近代文学文化史年表」については、将来データベースとして刊行されることを期待したい。なお、「九州演劇」総目次および同誌が果たした役割などを論じた論文「九州演劇」とその時代」を立教大学・江戸川乱歩記念大衆文化研究センターから刊行されている雑誌「大衆文化」（創刊号、平21・3）に掲載しているので、参照されたい。また、本年表では言及していないが、昭和23年8月に棚町知彌が創刊した雑誌「リドウ」以降の演劇状況、および、占領期におけるGHQの検閲などに関しては同氏が数多くの研究・証言を行っている。

年月	事項
戦争末期	昭和17年に総数14館だった福岡の劇場は、昭和19年頃から極度の資材不足と上演フィルムの調達困難に陥っていたが、昭和20年6月19日の福岡大空襲によって、中洲興行街は南新地の一部を残して灰燼と化した（福岡大空襲で焼失した主な劇場は、川丈座、相生座、福岡宝塚劇場、博多日活映画劇場、有楽劇場、多門座、福岡花月劇場、福岡東宝映画劇場、第一民衆クラブ、柳橋劇場、日活朝日館など）。この福岡大空襲は、午後11時10分頃～翌日の午前1時頃まで行われ、被災戸数12856戸、被災人口60599人、死者902人、負傷者1078人、行方不明者244人と記録されている。21日の「西日本新聞」には、その惨状が「油脂爆弾は全市にバラまかれた。絶え間なく

	<p>夜空を彩るその爆発閃光、雨とほとぼしるその炸裂光の中に、黒い影絵を躍らして飛込んでゆく防空頭巾、モンペの婦人防火班の姿はさながらに尊い戦士である。／雨と降る焼夷弾の中に、毅然とホースの口を握りつづける消防隊は、そのまゝに特攻魂に徹してみた。申し分ない敢闘だった。／「ふるさとの火となる夜に胸張って敵撃滅の明日を思へり」／郷土作家火野葦平氏が、焼夷弾の雨の中に醜翼を睨んで詠った感懷は、そのまゝに私ども福岡市民の烈々たる不屈の闘魂である」とある。7月3日～5日、焼失を免れた大博劇場で慰安無料奉仕興行開催。「尾上菊左衛門一座」が公演（6日からは普通興行）。7月10日・11日、福岡松竹（元・帝国館）、毎日館、聚楽座、吉塚映画劇場などが再開。7月27日、「福岡花月劇団」が大博劇場で移転公演。</p>
昭和20年8月	<p>1日～10日、大博劇場（上東町）で勇進座「大乘寺八郎」公演。移動劇団「さくら隊」が広島慰問巡演中に被爆。戦中、決戦非常措置（昭和19年3月5日実施）により閉鎖となっていた全国の劇場は、歌舞伎座、東京劇場、新橋演舞場、有楽座、東京宝塚劇場、帝国劇場、明治座、国際劇場、日本劇場（以上東京）、歌舞伎座、北野劇場、中座、角座、大阪劇場、梅田映画劇場（以上大阪）、南座（京都）、御園座（名古屋）、松竹劇場（神戸）、宝塚大劇場（宝塚）であったが、敗戦後まもなく、新橋演舞場、明治座、南座、大阪劇場、梅田映画劇場、御園座の6劇場が再開許可となる。8月15日から一週間、全国の映画館興行中止。関東・関西の劇団が交通難で九州巡業が滞るなか、福岡では九州訛りを前面に出す九州劇団が旗揚げされ、三河家桃太郎、樋口次郎、南條隆、博多淡海、大川龍之介らが一座の代表格となって仮設小屋での公演を開始した。芸題は毎日替わり、前狂言、中狂言、切狂言の3本立て。切狂言はシリーズもので、「また明晩のお楽しみ」という幕引きの台詞でお客を惹きつけた。15日～24日、大博劇場で「博多淡海一座」公演。18日、内務省、地方長官に占領軍向け性的慰安施設設置を指令。22日、市内電車の重要路線が運転再開。22日、ラジオの天気予報が復活。23日、電力制限が撤廃になる。26日、特殊慰安施設協会（RAA）設立（本部は東京銀座）。27日～30日、大博劇場で「福岡花月劇団」公演。30日、蓮池町の福岡松竹映劇、箱崎の毎日館、西新町の聚楽座が開場。中央から戦中の統制配給方式を踏襲する旨の通達があったため、紅白二系統に分けて上映。</p>
昭和20年9月	<p>1日、市川猿之助一座、東劇で戦後最初の歌舞伎興行を行う。木村富子作「黒塚」、木村綿花作「東海道膝栗毛」。3日、鹿屋飛行場にアメリカ軍の第一陣が到着。大博劇場で「新声劇団」（青柳勝太郎他）公演。10日、GHQ、「言論および新聞の自由に関する覚書」を日本政府に提示。これにより、報道可能な範囲を規定しGHQに関する事項の報道制限を実施するとともに、検閲が布告される（新聞は19日、出版物は21日、ラジオは22日より検閲開始）。10日～18日、大博劇場で一心座「若宮香太郎」公演。13日、福岡市議会に復興対策委員会設置。13日、戦後初めての封切映画「伊豆の娘たち」（監督・五所平之助）公開（一般公開に先だって12日には西日本新聞社主催、松竹と映画公社九州本部協賛で戦後最初の招待試写会〔場所は西日本新聞社講堂〕が行われた）。17日、西日本を中心に枕崎台風が上陸。全国で死者・行方不明者は3756名。17日、広島の前爆で死亡した移動劇団「さくら隊」のメンバー（丸山定夫、園井恵子、高山象三ら9名）の合同慰霊祭が築地西本願寺で挙行。19日、GHQ「プレス＝コード」（日本新聞規制に関する覚書）を指令。19日～23日、大博劇場で「福岡花月劇場」公演。22日、第5師団第28連隊の先遣隊が板付飛行場に到着。23日、占領軍向けラジオ放送（AFRS）始まる。24日、「報道の政府からの分離に関する覚書」が公布され、新聞、通信社に対する日本政府の統制支配が廃止されるとともに、報道のGHQ直接統治が始まる。24日～、大博劇場で「廣澤多見蔵一座」公演。30日午前11時25分、雨の中をギャラン少佐の率いるGHQ第1陣300人が佐世保から臨時列車で香</p>

	<p>椎町の陸軍需品廠の貨物ホームに到着。1時間後に自動車隊 30 台が到着。午後 3 時、第 3 陣 200 人が需品廠に到着。総指揮官はロビンソン代将。福岡市総務局編『福岡の歴史(福岡市史普及版)』（福岡市、昭 54・10）には、「福岡地区に來駐した米軍は、総数約四、五〇〇人と推定され、司令部を東公園の旧一方亭に、軍政本部を天神町の千代田ビルに置いたが、席田飛行場をはじめとする旧軍関係施設や軍需工場などが占拠されるとともに、戦災を免れた公共建物、民有ビル、ホテル、一般住宅に至るまで、主要な建物のほとんどが接収された」とある。月末、吉塚劇場が改修開館。</p>
昭和 20 年 10 月	<p>9 日、占領軍が福岡市記念館を娯楽場として使用する旨、申し入れ。9 日、GHQ が東京の新聞 5 紙（朝日、毎日、読売、東京、日本産業）に新聞事前検閲を開始。10 日～12 日、大博劇場で「劇団・娯楽市場」公演。13 日～19 日、大博劇場で「福岡花月劇団」公演。15 日、「新劇懇談会」（青山杉作、北村喜八、千田是也、八田元夫、遠藤慎吾、薄田研二、滝沢修、中村伸郎、山田肇、山本安英が参加）開催。20 日、天神町焼跡に公認の自由市場開設（12 月 4 日閉鎖）。20 日～28 日、大博劇場で「尾上菊左衛門」公演。23 日、有楽映画劇場に県からの建築許可（興行館の再建第 1 号）。この月、月刊「演劇界」（日本演劇社）復刊。聚楽座が米軍慰問用劇場として接収され、日本人向けの興行は週末と夜間のみとなる（昭和 21 年 3 月まで）。同館を経営していた柳瀬鴻はその頃の思い出として、「……進駐軍のところに数回陳情の結果、土曜の夜と日曜の昼夜だけ使ってよろしいということになりました。後になって夜は毎日使えるようになりましたが、ほんとうにくやしいことでした。だんだん落ちついてくるにしたがってお客さんもふえ、昼間来るお客様に夜六時より来て下さいと断る気持は興行の飯を喰った者でなくてはわかるまいと思います。／昼間はたった十人か十五人の GI さんが見ているだけで、負けた国民のくやしきも手伝てなおさら腹が立つわけです」（「フランケンシュタイン」、『博多・劇場五〇年のあゆみ』昭 47・8、福岡市興行協会）と証言している。</p>
昭和 20 年 11 月	<p>1 日、全国人口調査が実施される（福岡市は 66548 世帯、人口 250580 人）。1 日、福岡市記念館を進駐軍が接収し「タロー劇場」と命名。1 日、大博劇場が「廣澤多見蔵一座」公演。11 日～17 日、大博劇場で「阪東立花」公演。11 日～20 日、姪浜劇場で「廣澤多見蔵一座」公演。15 日、火野葦平・宇野逸夫・古海卓二らが有限会社・九州書房（渡辺通 4 丁目 190）設立（設立登記は昭和 21 年 3 月 2 日）。東潤「遠い自画像」（「九州文学」昭和 51 年 7 月）に、「社名は「九州書房」と呼称。資本金は十萬円の有限会社。会社所在地は火野仮寓の文化ハウス内。出資者は玄人を入れない九州文学同人を建前とした一部の幹部に限る。社長の名称を執らず専務取締役を代表取締役とする。なお、火野は都合に依り表面には出ないことを本人が強く主張した。ただし覆面社長として全面的に指示すること、出版物は成るべく文芸書に限ること、など準備委員会で決められた。（略）そして最終的に役員も決まった。すなわち専務取締役は古海卓二、取締役は劉寒吉、岩下俊作、長谷健、矢野朗、監査役は中村勉、森田緑雨であった。／それに事務機構は、営業部長が宇野逸夫、編集部長が矢野朗、庶務および経理部長が東潤。また社員として風木雲太郎、岡部隆助、吉牟田稔、林少年（後、山田少年）、炊事の女性一人、といった膳立てだった」とある。15 日、GHQ が東京劇場で上演中の歌舞伎「寺子屋」を反民主主義的として中止命令。16 日、占領軍用の国際舞蹈場「メトロポールキヤヴァレー」（渡辺通り 5 丁目）開業。18 日～24 日、大博劇場で「福岡花月劇団」公演。19 日、GHQ が「封建的」と評価した日本映画 236 本を上映禁止にする。19 日、福岡県庁内に終戦連絡事務局が設置され進駐軍との渉外事務を担当。20 日、GHQ、「ラジオ通信統制に関する覚書」でラジオ放送に対する検閲基準を指示。21 日～27 日、姪浜劇場で「阪東立花」他が公演。24 日、芸能文化検討会設置（松竹が設けたこの検討会には部外から河原繁俊、</p>

	<p>久保田万太郎、渥美清太郎が参加し、自主的に歌舞伎脚本を検討、禁演目録を作成)。25日～30日、大博劇場で「カトリ舞踏楽劇団」公演。月末、映画公社の解散にともなう紅白2系統配給制度は撤廃、12月からは自由配給が復活となる。松竹、東宝、吉本の各会社代表が米軍民間情報教育部のリース、ゴルフ両大尉と面談し、演劇の上演に関して、○今後上演さるべき演劇脚本は、過般発表された連合軍の映画製作指導方針どおりとする、○脚本は上演一週間前に英文による筋書一部、和英両文の台本各二部を米軍民間情報教育部に提出する、○検閲を受けた脚本の筋書変更は許されない。変更する場合はリース大尉の許可を受け、許可なくして変更した場合はその上演を停止されることがある、○東京における合格脚本は東京以外の土地でも有効、○12月1日から各劇団は上演番組の30%以上を新作とすること、以上の指示を受ける(9日「東京新聞」より要旨抜粋)。この月、社団法人・映画配給社(のち映画公社)が解散。</p>
昭和20年12月	<p>1日、雑誌「世界」、「展望」がそれぞれ創刊。1日～3日、姪浜劇場で「野上甚吉一行」公演。1日～5日、大博劇場で「川浪良太郎」他の公演。2日、映画法廃止。6日～10日、大博劇場で「博多淡海一座」が公演。8日～10日、姪浜劇場で「宮城千鶴子」公演。11日～15日、大博劇場で「娯楽市場」が公演。同、姪浜劇場で「潮龍太郎一行」の公演。14日～23日、姪浜劇場で「博多淡海一座」公演。16日～22日、大博劇場で「福岡花月劇団」公演(花月劇団はこの後、翌21年1月15日まで一ヶ月間、昼夜連続出演を続ける)。20日、吉塚映画劇場(経営・西口紫溟、支配人・安川愛二)。22・23日、再建された柳橋劇場(新柳町)が開館披露特別興行「日本浪曲界吉例絶妙の浪曲大会」(春日井梅鶯、梅中軒鶯童、玉川勝太郎、芙蓉軒麗花、巴うの子／新人・近江勝、雲井天晴)を開催。23日、西鉄高宮駅前に高宮映劇開館。福岡放送局による「沖縄同胞救済音楽会」が九大医学部講堂で開催(占領軍も参加、全九州中継放送)。占領軍用の国際社交場ハリウッド(長浜町)の開場式。24日～昭和21年1月10日、柳橋劇場で「娯楽市場」の公演。25日、キャバレー博多(第一平和館4階)開館。26日、新劇合同初公演「桜の園」が東京有楽座で開幕。27日、被災箇所への応急大改修工事を終えた博多日活劇場(日活直営、大映封切)が開館。28日、天神二八番地の旧九州日報社屋跡に西日本新聞社が関与した西日本映劇(東宝系封切)が、片土居町十五ビル内に第一平和館(松竹直営)が、開館。31日、新柳町に朝日館が再建開館。年末頃、福岡自由文化聯盟結成。福岡市内の映画館四館(福岡松竹映劇、毎日館、聚楽座、吉塚劇場)が12月に記録した入場者合計数は288000人(その62%にあたる178000人が福岡松竹映劇に殺到)で、当時の福岡市の人口250000人の約70%に相当する大入りだった。ちなみに、この年の日本人のエンゲル係数(家計消費支出に占める飲食費の割合)は70%に近く、それでいて一人あたりの平均摂取カロリーは1380kcalという飢餓状態だった。この月、新劇人が「新劇人クラブ」結成。発起人は青山杉作、北村喜八、久保栄、杉村春子、薄田研二、滝沢修、千田是也、東野英治郎、中村伸郎、八田元夫、三島雅夫、山本安英の12名。情報局が廃止され、演劇は文部省社会教育局に新設の芸術課に所管が移った(初代課長・今日出海)。旬刊「興行ヘラルド」(日本映画出版)刊行。</p>
昭和21年1月	<p>1日～10日、柳橋劇場で「専属劇団 娯楽市場」(演劇部／小宮譲次、海東義児、伊吹夜詩夫、長井猛、大内重四郎、町田朝太郎、今田実 間君代、大山泰子、伏見松子、飯田嘉久子、名島妙子、青山みどり 黒川緋露子、清水宣子)の公演。1日～10日、姪浜劇場で「廣澤多見蔵一座」公演。10日、東京で紙芝居が復活、景品は「せんべい」と「芋アメ」。10日、千日前の有楽映劇(東宝系封切)が戦前と同じ場所に開館。12日の「西日本新聞」は、「懐しの東中洲／かつて西日本随一の殷盛を誇った博多東中洲の歓楽街はいまどんなに変ったか——水美しい那珂川と博多川とに囲まれたこのデルタ地帯に戦災の劫火が吹きまくってからすでに八ヶ月、櫛比した料亭、飲</p>

食店、映画館、劇場その他ありとあらゆる歓楽施設が一木一草も残さないまでに焼きつくされたあとにはただ六、七階を焼かれた玉屋デパートと福岡中央電話局だけがこの死の街に残された、情緒の都博多の伝統をここ一ヶ所に集めた懐かしい「東中洲」の風景は永遠によみがへらな
いかに見えた、だが見給へ新生の春はもう、「焦土の歓楽地」に復興のいぶきを吹き込んだ、力強い槌の音、のみの響きは西大橋の橋脚にこだまして日ごと木の香新しい新築の風景がふえて
来た、映画館では大映映画劇場の復興をトップに有楽映画劇場も十日から新装成つて開館だ、そ
の隣には寿座も復活するだらう、大映の向ひ電車通りには日活系の大映映画劇場もいま板塀に囲
まれて新築中、映画かへりの客を吸ひ込んでゐた食堂筑後屋ももとの敷地に建築計画成つていま
は木材の山だ、華やかな千日前の再現は案外に早い、那珂川畔、西大橋の袂にいまは昔、夏の宵ご
とにビール党をよんだビール園は隣接の中華園の敷地まで買ひ込んで拡張された新生の姿で復
活するだらう、戦災に焼けた植木に代つて新しい緑の庭木がもう建物より先に植ゑこまれた、そ
の他にもろもろの計画はもうこのデルタ東中洲を蔽うてしまつた、東中洲はよみがへる、けふもま
た北風が寒い、だが西大橋から川端へ中洲をよぎる電車通りの人波はもう再現も近いのだらう西
日本一の歓楽街の追想に酔つてゐる、かうした復興の東中洲にもしかして戦禍のなごりはまだ深刻
だ、電車停留所のあたり空つ風をさけた日陰りの路傍にあはれな戦災孤児はもう人生の悲哀を忘
れ果てて赤表紙の日米会話をひろげてゐた」と報じた。10日～20日、柳橋劇場で「樋口次郎一党」
が公演。11日～15日、姪浜劇場で「劇団・きびだんご」の公演。14日、占領軍将校クラブが女
給30名、ダンサー20名を急募。14日、「西日本新聞」が無署名記事「胎動する西日本文化の展望」
を掲載し、福岡の演劇活動を「演劇界は極めて活潑である、戦後編成された劇団は福岡市だけで
も八つを数へ、移動演劇まで入れば各地に新編成されたものは夥しい数に上るが、これらの舞
台はいづれも浮薄な傾向のもののみ上せられ、娯楽に飢ゑた民衆の無条件な喝采をいゝことにし
て甘やかされるままにその日を送つてゐる、といふのが九州演劇界の現状のやうである。／福岡
を中心とするものに花月、宮城千鶴子とその楽団、娯楽市場、新世紀、福岡芸能劇団、北九州楽団、
朝日舞踊団、西村正人、花沢章とその楽団等々から劇団きびだんご、リズム・ハツタン・ボーイ
ズ、剣戟の南條隆一座、春日新九郎、櫻富士子合同座、阪東多門、阪東多門から歌舞伎の八百蔵一
座——もちろん、この中には戦時中から待たれてゐた劇団もあるが、いづれにせよ大衆を呼ぶの
に何らの条件を必要としないいはば演劇界の好景気の波にのつて誕生したこれらの劇団はいき
おひにおいて限られた演技者の引抜きに奔走せねばならないし、これを防止せんとする経営者側
との葛藤の過程においてその芸術性は反比例してゆく危険がある。／その間演出家の貧困とい
ふことも劇界低調の一原因であらう、興行界低調の一方純粋な芸術としての劇活動をもくろむも
のに九州演劇協会の演劇運動がある、これは雨宮毅、河原重巳、望月孝丸、古海卓二、劉寒吉ほか
九州文学の同人が主体となつて「庶民座」の仮称で年四回の公演を企画してゐるが果してどの
やうな方向に進むかはほぼ四月頃と予定されてゐる初公演を観てからのことである、素人劇団に
鶴岡高を中心にする八幡の「青春座」、下川健夫を主幹にする熊本の郷土劇団などもある」と批
評。15日、ラジオで「復員だより」の放送開始。16日～20日、姪浜劇場で「小金井勝・東昇二
郎」合同公演。大博劇場で「東西花形大歌舞伎」（市松延見子他）公演。19日、ラジオ「のど自
慢素人音楽会」の放送開始。19日、昭和20年暮に朝鮮から帰国した村山知義が旧劇団員によび
かけ新協劇団再建。21日、GHQが「公娼容認の法規撤廃の覚書」を提示。22日～柳橋劇場で「娯
楽市場」の公演。22日～28日、大博劇場で「福岡花月劇団」の公演。24日、GHQが公娼を認め
るすべての法規を撤廃。24日～、西日本映画劇場で「本城章とその楽劇団」による「ゴールド・

	<p>スターシヨウ」。25日～31日、姪浜劇場で「ワカバコウジ」の公演。27日～、柳橋劇場で「娯楽市場」の公演。28日、GHQが「映画検閲に関する覚書」を公布し、映画検閲が開始。28日、キャバレー・ナンバーワンが翌月の開館（東公園内）のためダンサー急募。29日～31日、大博劇場で「新邦楽劇団」が初公演。月刊「九州文学」（九州文学社）復刊【注1】。東中洲繁華街の復興が進み、映画館「有楽映劇」再建。石井漠門下で唐津出身の寒水多久茂、「福岡劇場」（柳町）専属舞踏団代表に就任。この月、「改造」、「中央公論」がそれぞれ復刊。</p>
昭和21年2月	<p>1日、沖縄芸能公演（沖縄文化聯盟主催）、西日本新聞社講堂で開催。同、キャバレー博多が平和会館（片土居町）内に開業し、一般公開。1日～5日、姪浜劇場で「福岡花月劇団」の公演。同、柳橋劇場で「神道浩一党」が公演。2日、大博劇場で「楽劇・青春地帯」が第一回公演。8日～12日、大博劇場で「博多淡海一座」が公演。13日～17日、大博劇場で「新邦楽劇団」が公演。13日～28日、柳橋劇場で「さくら富士子一党」が公演。西日本映劇で「石井春瞳とその楽劇団」が公演。15日～17日、高宮映劇で「紅梅楽劇団」が公演。16日、占領軍将兵厚生施設・レインボー・クラブ（天神町・旧大和生命ビル）開設。同日の「西日本新聞」は「占領軍将兵に久しく待望されてゐた新設のレッド・クロスは「レインボー・クラブ」と銘打つて十六日より福岡市天神町旧大和生命ビルで幕開けするが、同クラブは図書室、簡易酒場、娯楽室など諸般の施設を備へた素晴らしいもので、日米両国婦人が占領軍将兵のサービスに当ることになつてゐる」と紹介している。16日、キャバレー・ナンバーワンがダンサー300人を大募集。17日、福岡放送局で福岡放送劇団編成のための選考。18日～22日、大博劇場で「福岡花月劇団」公演。21日、柳橋劇場で「浪曲大会」開催（廣澤寅造他公演）。21日～24日、高宮映画劇場で「佐和田キヨシとその楽団」公演。毎日館で「大江茂と笑ふ音楽列車」公演。22日～24日、大博劇場で「爆笑劇団 松竹家庭劇」公演。西日本映劇では「田中淳一と淳ちゃんグルツペ」、「楽団・新世紀」が公演。23・24日、大博劇場で「宮城千鶴子」、「青春地帯」、「楽団「ニッポン」」公演。24日、東京宝塚劇場を「アーニーバイル劇場」と改称。25日、玄洋社をはじめとする45団体が軍国主義団体として解散命令を出される。25日～3月3日、大博劇場で「廣澤多見蔵一座」公演。27・28日、姪浜劇場で「市川男女之介一行」が公演。28日、アメリカ映画2本（「春の序曲」、「キューリー夫人」）が戦後初めて封切られる。特にグリア・ガースン主演の「春の序曲」は日本初のキスシーンとして話題となる。28日、古海卓二・雨宮毅・原田種夫らによる劇団・庶民劇場の結成が報じられる。この月、東公園内に「キャバレーナンバーワン」開業。この頃、二日市町紫には占領軍将校専用ダンスホール「紫園」もあった。</p>
昭和21年3月	<p>1日～、東京で日本美術展「日展」開催。1日～10日、柳橋劇場で「三河家桃太郎一党」が公演。3日、西日本女学生連合大音楽会が復活し九大医学部中央講堂で開催（第19回）。4日～8日、大博劇場で「福岡花月劇団」が公演。6日、初のスポーツ紙・日刊スポーツ創刊。9日・10日、大博劇場で「富士月子」公演。11日・12日、柳橋劇場で「梅中軒鶯童一行」が公演。11日～15日、大博劇場で「一心座・若宮香太郎」が公演。13日～20日、柳橋劇場で「小金井勝一党」が公演。箱崎東宝で「浅草富丸とその楽団」公演。朝日館で「新邦楽劇団」「新邦ジャズ・バンド」公演。16日、歌舞伎俳優の片岡仁左衛門が家族4人とともに惨殺された姿で発見される。原因は同居人の食べ物への恨みによるもの。16日～18日、大博劇場で「ミスワカナ・玉松一郎」、楽団「銀の星」公演。17日、大学高専大音楽会が九大医学部中央講堂で開催。17～21日、大博劇場で「ナンリ幸太郎」公演。18日、自由映画人集団幹事が自ら戦争犯罪者を決定し、映画界および文化面から追放。作家・菊池寛、松竹社長・大谷竹次郎などがA級とされる。19日、俳優座の第1回公演</p>

	<p>が開幕。演目はゴーゴリ作「検察官」。19日～21日、大博劇場で「宮城千賀子」公演。21日～24日、高宮劇場で「佐和田キヨシとその楽団」公演。箱崎東宝で「大江茂と笑ふ音楽列車」公演。21日～31日、柳橋劇場で「玉川成太郎一党」公演。22日～26日、大博劇場で劇団「松竹家庭劇」公演。23日～高宮映画劇場で「マンハッタン・リズムボーイズ」公演。27日～31日、大博劇場で「ナンリ幸太郎」公演。地方放送の再開と演芸放送陣の強化を図る目的で福岡放送劇団（男女約30名）が編成される。第1回の放送作品は雨宮毅の書下ろし「博多千一夜」（演出・河原重巳）を予定していたが、諸事情により放送中止。代わりに菊田一夫作「南風」を雨宮毅の脚色で放送。27日、GHQの覚書により対占領軍慰安所が閉鎖される。演劇評論家による「演劇ペン倶楽部」創立。東京、大阪、京都他各地の著名な評論家が集まり、準備委員として渥美清太郎、安藤鶴夫、戸板康二、利倉幸一、池谷作太郎、大江良太郎、水木京太の7名が選出。この月、週刊「スクリーン・アンド・ステージ」（映画演劇社）、「キネマ旬報」（キネマ旬報発行所、月2回）、月刊「映画之友」（映画世界社）、月刊「映画ファン」（映画世界社）刊行。GHQ後援のもとにセントラル・モーション・ピクチャー・エクステイニンジ（CMPE）が設立され、大阪、名古屋、福岡、札幌に外国人支社長が派遣、アメリカ映画会社9社の作品を配給（福岡は英語が堪能な日本人、伊賀了がセントラル映画社の支社長として赴任）。この頃の演劇状況について蔦一風「都市展望 福岡」（「文化展望」創刊号、昭和21年3月）は、「強制疎開で田舎に立退いたり戦災で家を焼かれて福岡に還らうとしても住むべき家がなく簡素な復興式住宅建築が施行されてはゐるが価格が高くてこんなバラックでも庶民階級には手も足も出ぬ。こんなことには頓着なく映画館や娯楽場は相次いで豪華なものが出来てゆく。そしてこれに対して住む家のない人々のみでなく一般大衆から非難の聲が高まつてゐる。占領軍専用の娯楽施設は当然であらうが映画劇場、高等料亭等が野放図に殖えて、どうなるのか……といふ輿論も多い。高等料亭の如きは間値段を釣上げる機関たる以外の存在価値はないとしてもこの食糧危機に映画や芝居などの芸術どころではないといふ考へもあるやうだがむしろ、かういふ危機にこそ社会政策、思想感情の主軸になるやうな良い芸術の発生をわれらは希求してやまぬ。／福岡を中心に花月劇場、娯楽市場など軽演劇とレビューを主体としたものがウチヤウチヤと族出してゐるが、孰れも気品と香りに乏しく芸術価値の稀薄なものばかりで、知的新人の登場を求めてやまぬ。／民主々義新日本の建設は芸術の部面でも学問の部面でも過去の因襲に染ぬ潑刺たる若人の手によつて再建されねばならぬ」と記す。</p>
昭和21年4月	<p>1日、トリス・ウキスキーの発売再開。1日、戦前からあった寄席・共楽亭（水茶屋町）が再開場。1日、春日原劇場が開館し「大歌舞伎・尾上菊左衛門」公演。1日～3日、大博劇場で「吉田奈良丸」公演。1日～10日、柳橋劇場で「樋口次郎一党」公演。2日、占領軍専用ダンスホール「紫園」が「麗人募集」。3日、東中洲の電車通りにアメリカ映画専用の福岡大洋映画劇場（経営・岡部重蔵、セントラル、敷地は370坪、木造2階建）がオープンし、CMPEとの「戦後日本第一号契約館」となる。開館披露作品は「チャップリンの黄金狂時代（日本語吹替版）」、1週目の動員は39127人。入場料は大人4・5円、小人3円。3日、在福の文学関係者が「福岡文学者会」結成準備会を開催。3日～7日、大博劇場で「大阪女文楽人形浄瑠璃」公演。有楽映劇が新装開場し「大江茂と其の楽団」公演。6日、満州からの初の集団引揚船が博多に入港。6日～10日、春日原映画劇場で「玉川信子一党」公演。7日、共楽亭に春風亭柳好、桂右女助、小金井芦洲が出演（午後1時より寄席中継あり）。8日～11日、大博劇場で劇団「新世紀」公演。10日、共楽亭に「西條凡児・一枝」他出演。聚楽座で「青春地帯」公演。朝日館で「新邦楽劇団」公演。吉塚劇場で「はかた劇団」公演。11日・12日、柳橋劇場で「座長大会」開催（江見三郎、三河家桃太郎・中村圓十郎・</p>

	<p>阪東歌門・樋口次郎)。12日～14日、大博劇場で「新風座」初公演。14日～18日、柳橋劇場で「福岡花月劇団」公演。15日、ダンサー、女給らに週1回の性病検査が義務づけられる。「ちり紙」の配給実施。大都市では1人50枚。15日～18日、大博劇場で「劇団わかくさ・只野凡児」公演。20日、東京銀座で復興祭始まる（200店中150店が開店）。21日～30日、柳橋劇場で「ワカバコウジ」公演。22日、長谷川町子「サザエさん」が夕刊フクニチで連載開始。宝塚歌劇が戦後第1回公演を開催、演目は「カルメン」。25日～29日、大博劇場で「福岡花月劇団」公演。28日～共楽亭で「東京寄席界の名流大会」開催。15日から日本劇場がTDA総出演の「春まつり」を公演。26日、土方与志らによって「新演劇人協会」創立総会が開かれ、民主演劇の創造と普及を目的とする綱領が採択される。28日、国際社交場ハリウッド、野外ダンスホール開設につき「麗人ダンサー大量募集」。この月、夕刊フクニチ創刊（夕刊紙発行は昭和19年3月に禁止となり、戦後もGHQにより朝刊紙発行会社の夕刊発行は禁止された。そこで、各新聞社は別会社を設立して夕刊を発行した。「夕刊フクニチ」は元西日本新聞社員の浦忠倫らが創刊。当初は西日本新聞社内に編集局を置き、西日本新聞社員も多数出向し、昭和24年3月まで委託印刷をおこなったが、24年に入って独立社屋に移転。やがてスポーツ紙も発行する独立会社に発展した）。「九州タイムズ」、「夕刊新九州」、「西部美術」、「週刊ワールド」創刊。この月、西口紫渇が九州地方劇団協会【注2】の会長に就任。28日、「日本映画演劇労働組合」結成。日本移動演劇連盟が民主主義的脱皮を行うために定款を改正。会長には土方与志が選出され、文部省から30万円の補助金を受けることになる。軽演劇作家による「日本劇作家組合」が結成される。執行委員は小崎政房、大町龍夫、小沢不二夫、波島貞、木村学司、加納浩、依田一郎、淀橋太郎。のちに「九州演劇」（昭和21年6月）の「芸能通信」は、「封建演劇の打倒、民主劇団の創造を叫んで再建新協劇団、文学座が再出発の公演を開催する一方東芸、俳優座、文芸劇場、空気座、白鳥座、薔薇座等が相次いで旗挙げし果敢な演劇革新の序曲を奏でたが東宝の傘下に入った東芸、松竹と提携した新協、吉本の後援を獲得した空気座以外の諸劇団は、劇場難に災ひされて活発な公演活動を継続出来ず、東童やかもしか座のごとき児童劇団も地方公演でお茶を濁している現状」と報告している。東劇の4月公演は、遠之助劇団に水谷八重子の特別参加で、第1部は宇野信夫作「沈丁花」、渥美清太郎作「舞踊劇 峠の万才」、舟橋聖一作演出「瀧口入道の恋」、第2部は「松風雨村」、舟橋聖一作「春色薩摩歌」。4月の帝劇、菊吉合同公演は、第1部が黙阿弥作「四千両小判梅葉」及び「高時」、第2部に小山内薫作「息子」及び「保名」、久保田万太郎作「大寺学校」を上演。27日より5月5日まで、第3回の帝劇芸術祭開催。歌劇「カルメン」（演出／青山杉作、音楽指揮／M・グルリット）と決定。配役はドンホセ（藤原義江）、カルメン（北沢栄）、同（四家文子）、ミカエラ（大谷冽子）、同（三上孝子）、エスカミリオ（下八川圭祐）、同（秋元清一）、フラスキータ（瀧田菊江）、メルセデス（小林智慧子）、ツニカ（関忠亮）等。「九州演劇」（昭和21年5月）の「芸能通信」は、「水の江瀧子の劇団たんぽぽから離れて浅草花月劇場に第一回公演をした劇団「空気座」のスタッフは文芸部に小崎政房、小沢不二夫、加納浩、吉田史郎、演技部に有島一郎、堺駿二、田中実、山吹徳二郎、沢村い紀雄、左ト全、並木瓶太郎、宮川孝子等であるが今回企画協議会委員に林弘高、友田純一郎、村山知義、安藤鶴夫、水町青滋、三好十郎を迎へ企画面の充実を期することとなつた」と伝えている。この頃の興行状況について、雑誌「前進」（昭和21年4月）の「前進時評」（前進子）は、「映画館は慌しく復興し近いうちには戦前以上の数になるといふが、上映される作品はいづれも見るに堪えるものはなく、軽演劇団が相次いで生れるがこれまたわびしい代物のみで徒らに空虚な笑ひを観衆に強いるばかり、西日本の文化の中心都市を誇つた福岡も、文化面に於</p>
--	--

	<p>でも焼跡の混乱状態から立ち上らない。／福岡自由文化聯盟の結成が昨年暮伝へられたが、これも戦災住宅と同様まだ実際活動は遅々として進まないようである。同聯盟など中心になつて、文学、音楽、美術等各部面の文化復興、新文化建設に立ち上がつてもらひたい。／新刊の広告は盛んに見えるが本屋の店頭には現はれず、雑誌さへもなかなか手に入らない。図書館の蔵書は疎開されてゐた筈だが、それを取り戻して再建する計画もまだ耳にせぬ。焼け残つた裁判所や警察には戦前戦中に押収した民主主義的な出版物が多数に残つてゐるだらう。さうしたものに個人の篤志家の蔵書を蒐めて勤労者のための図書館をつくることは出来ぬだらうか。大きな建物である必要はない、むしろ簡易小図書館が散在することが望ましい。文聯はこの方面にも努力してもらひたいと思ふ。／大衆は精神的にも飢ゑ切つてゐるのである」と記している。</p>
昭和 21 年 5 月	<p>1 日～5 日、大博劇場で「曾我廼家・五郎劇」公演。1 日～7 日、柳橋劇場で「樋口次郎・ひぐち初子一党」「鹿島順一」公演。1 日～7 日、春日原映画劇場で「阪東多門大一座」公演。1 日～31 日に「新日本平和博覧会」を開催予定だったが計画が頓挫。高木市之助・原志免太郎・尾島信好らが出版社「叡智社」を設立し文化誌「叡智」創刊。2 日、聚楽映劇が「芸能劇団公演・夏のおどり」上演。2 日～、西日本映画劇場が「楽団・青春地帯」公演。2 日～5 日、「新邦劇団」公演。3 日～9 日、第 1 回・西部美術協会公募展、西日本新聞社講堂で開催。5 日、「九州演劇」創刊（昭和 21 年 5 月 5 日発行。発行所は九州演劇社〔福岡市警固本町 33〕。編輯兼発行人は雨宮毅。巻頭の「発刊の辞」では社長・中島守が、『九州演劇』は飽くまでも演劇文化の研鑽誌であり、地方に於ける隠れたる人材を創る推薦機関たることを期するものである。／より高く、より美しい演劇文化へ！」と述べている）。5 日、共楽亭に「神田山陽」出演。6 日、ラジオ「街頭録音」の放送が街頭討論会として開始される。6 日、姪浜劇場で「東西合同大歌舞伎一座」（市松延見子・中村福助）公演。8 日、福岡劇場（新柳町、収容人数 1500 名）の新装開館披露に舞踏家の石井漠、映画スターの月丘夢路、流行歌手の林伊佐緒の一行が参加して「福劇舞踊団」第 1 回公演。演目は、(1) 純粹舞踊「ワルツの花束」（振付は石井漠の高弟・寒水多久茂、恵良八重子、衣装・舞台装置は望月孝丸）。(2) 「福劇祭」15 景（雨宮毅・構成作品）、(3) 月丘夢路と楽団。同劇場には、15 日から轟夕起子と逢初夢子が、22 日から羅門光三郎と阿部九州男がそれぞれ来演。8 日、福岡における大道具製作の良心的研究及び組合員の共済を目的に、大久保博芳氏の斡旋で「博多大道具研究組合」結成。組織は、背景部、木工部、小道具、飾付、照明となっている。福岡市の三帆書房が総合雑誌「文化展望」を創刊【注 3】。社長は三帆醬油社長・宮崎宣久、編集長は大西巨人。8 日～9 日、柳橋劇場で「キング豪華合同ショー」開催（兒玉好雄・横山郁子・青木伸とその楽団・あひる艦隊）。8 日～10 日、大博劇場で「オリエ津坂」公演。12 日、共楽亭で「東西落語競演会」開催。11 日～13 日、大博劇場で「三浦八郎」「幸運の星とその楽団」公演。13 日～20 日、柳橋劇場で「ワカバコウジ一党」公演。14 日、東宝交響楽団が東京で第 1 回公演を開催。14 日、春日原映画劇場で「大浪曲・松浦四郎（特別出演・桜武子）」公演。14 日～16 日、大博劇場で「宝塚歌劇・花組」公演。15 日、「思想の科学」、「リーダーズ・ダイジェスト（日本語版）」創刊。15 日、九州学生同盟（全九州の大学・高等専門学校生の組織）の機関誌「探求」創刊。15 日・16 日、姪浜劇場で「西日本浪曲中堅幹部座長大会」開催。15 日～、福岡劇場で「福劇舞踊団」「阿部九州男」ほか公演。16 日、筑紫劇場で「劇団七曜座」第 1 回公演。18 日、共楽亭で「東西落語競演会」開催。18 日・19 日、「引揚者援護資金募集芸能大会」が九州各地で開催。福岡会場は西日本新聞社講堂。姪浜劇場で「杉山晶三九・東龍子・阿部九州男・合同第一座」公演。大博劇場で「華井新」ほか公演。21 日～31 日、柳橋劇場で「さくら富士子一党」公演。23 日～、西日本映画劇</p>

	<p>場で「田中淳一とグルツペ」アトラクション公演。23日、映画「はたちの青春」（主演・幾野道子）が封切られ、日本映画初のキスシーンが話題になる。23日～、聚楽映劇で劇団「東京の青空」公演。23日・24日、大博劇場で「雲の子嬢」公演。23日・29日、福岡劇場で「舞踏劇・スペインの薔薇」他上演。25日、第一次博多復興祭が奈良屋国民学校を主会場に開催。松ばやし、博多どんたく、子ども山笠が復活。25日～29日、大博劇場で「福岡花月劇団」公演。26日、西日本新聞社講堂において、「九州自由文化聯盟」が発足（福岡文学者会、事務所は建立寺内）。「九州演劇」（昭和21・6）の「芸能通信」は、「現在、尚我国に残存して再挙の機を窺ふ封建主義思想の残滓を絶ち、真の民主主義国家を建設するには、文化の中央集権制を排して、強力且つ自主的な地方文化団体を組織せねばならぬとする主旨に発した」とある。また具体的な活動としては、「在九州の文学、演劇、映画、音楽、絵画、科学等各分野の文化団体（及び個人）の並列的な連絡をなし、懇談会、研究会、講習会、講演会、音楽会、レコード・コンサート、演劇、美術展、内外の進歩的文化団体との連絡及び出版物の刊行等を行ふ」と記している。29日・30日、林逸馬「九州文芸界の始動（上）（下）」が「西日本新聞」に掲載される。30日、大博劇場で「巴うの子」公演。30日、住吉南新町に「金龍館」（松竹系）開館（昭和24年2月末という説もある）。30日・31日、福岡劇場で「近江勝」公演。31日、共楽亭で「柳家小満ん」公演。舞踊研究生を育成してきた西日本芸術研究所（洋舞・前川繁尚、日舞・木村壽美）が第1回発表会の開催を決定。福岡放送劇団、第2回公演（演目は「山鳩の宿」）。理研の「シネトピックス」（毎週発表）創刊。28日、「日本青年演劇同盟」が結成される。参加したのは薔薇座、独立劇場、協同劇場、人間座、文芸劇場、白鳥座、人生劇場、人民座、共産青年同盟の9劇団。「劇場を持つた劇団」の誕生が予告される（「九州演劇」昭和21年6月）。この劇団は伊馬鶴平、阿木翁助、富沢一郎等が中心となり、演技部には永田靖、新田地作、浮田左武郎、山村聡、中江隆介、田所千鶴子、本間教子、日高ゆりゑ等が決定。また、長浜藤夫、宮口精二、荒木道子および沢村宗之助の協同劇場の参加も予定。劇団名は「東京組合劇場」とし、同劇団の公演以外にも一般の新劇団に解放する。松竹国民移動劇団（地人座）の市川女太朗や中村竹弥等が劇作家・和田勝一や音楽家呉泰次郎等の指導支援の下に劇団「民衆座」を結成。全国の労働組合や農民組合を対象に活動することを宣言。5月の菊吉合同公演は東劇において開催。宗十郎、壽美蔵、三津五郎を加えて久方ぶりの歌舞伎大顔合せ、昼夜二部制。一部は坪内逍遙作「良寛と子守」、里見弴作「新樹」及び「助六」、二部は宇野信夫作「むかしの母」、「六花仙」及び「弁天娘女夫白浪」。月刊「演劇人」（建設社）、月刊「スクリーン」（近代映画社）創刊。寒水多久茂が「福劇舞踊団」（「九州演劇」昭和21年5月）に、「君見たかね×劇場でやつてゐる○劇団の公演を、驚いたものだ、あれでお客さんから金を取らうなんてもつての外だ。福岡といふ所は九州では第一の文化都市だといはれてゐるがどれを見てもこれを見ても腹が立つやら悲しいやら……あんなのは観客の方で一刻も早く処理してしまひたいものだね。舞台に立つ人間——舞台人とは取て言ひたくない——も悪いが立たせる興行師はなほ悪い。（中略）福岡劇場が芸術舞踊を上演目録の一部として取入れたことは蓋し日本では最初であり将来の劇場のアリ方として先鞭をつけたものとして自負していゝのではないかと思ふ。戦時中の束縛から解放された反動とも解釈されようし民主主義自由主義の誤った解釈だとも言へようが終戦後国民の精神生活肉体生活の地に落ちた姿を、余りにもまざまざとしかも数多く見せつけられてきた。そしてその国民の弱点につけこんで出来上つたのが現在ある福岡の演劇団の総てだと思ふ。私はかゝる百害あつて一利もない演劇団の即時解散を願ひてやまないものである。／福岡劇場は大衆と共にありたい。芸術のための芸術ではなく大衆のための芸術でありたい。楽しませながら向</p>
--	--

	上させてゆきたい。福岡劇場は理由があり価値があり個性があり愛があるのである」と記す。
昭和 21 年 6 月	<p>1 日～5 日、大橋劇場（西鉄大橋停留所横）が「良心的企画に依る東西劇団の招聘上演」を謳って開場し、「高杉朝子大一座」が公演を行う。1 日～、柳橋劇場で「江見三郎・里見順子一党」公演。1 日～3 日、大博劇場で「大谷日出夫」他公演。福岡劇場に大映俳優大挙来演。1 日～3 日、福岡劇場に千明明子、水原洋一、斎藤紫香、若原初子などの大映俳優が大挙来演。1 日～10 日、多門座（福岡市東中洲・西本芸能社）が再建、「阪東多門一座と鈴木太郎愉快劇（須田村桃太郎・協力出演）」公演。4 日・5 日、福岡劇場で「逢初夢子」他公演。4 日～6 日、大博劇場で「市川右団次」他公演。箱崎東宝で「青春地帯」公演。6 日、千代町に福岡国際劇場（経営・佐藤勝之、支配人・橋口尚郎）オープン。定員は椅子席 1300 人、立見席を合わせると収容能力は 2500 人。ホールの玄関正面に噴水池を作って魚を泳がせ、その一角には 50 名を収容できる喫煙室、喫茶と食事のできる施設をもち、30 台以上の車が駐車できるコンクリートの広場を持っていた（当時の日本において、駐車場を持つ映画館はほとんどなかった）。また、他館にさきがけて専属アナウンサーを置き、映画の解説、次週映画の予告、突発ニュースの放送を行うとともに、案内嬢の観客呼出サービス、場内の案内、毎週発行されるプログラムの無料配布が評判となる。開館記念作品は「ノンストップ紐育」+ 短篇+ ニュース 2 本、入場料金は大人 4・5 円、小人 2・25 円（入場税 5 割を含む）、第一週の入場者は 22456 人、興行収入 64512 円を記録した。当初は大映の封切館だったが、8 月から米のセントラル映画配給社系列に入り、第 1 作「旋風大尉」では 1 週間に 42000 人も観客を集めた。同劇場は映画興行だけでなく、要望があれば市民に劇場を利用してもらう方針を立て、のちには九大の管弦楽団、福岡市交響楽団の定期演奏会、ジャズバンドの競演会、東京フィルハーモニー交響楽団の演奏を行ったほか、大学、高等学校の卒業イベントにも無料で貸し出された。6 日、東京で前進座と東宝が合同のミュージカル「真夏の夜の夢」（演出・土方与志）を公演。6 日・7 日、大橋劇場で楽劇「ふるさと」、爆笑歌劇「オペラ座」公演。6 日～9 日、福岡劇場で「宮城千鶴子とその楽団」が「歌謡物語 千鶴子歌謡曲集 唄ふアルバム」を披露した他、「福劇舞踏団」も公演。6 日、春日原映画劇場で「ミヤコ蝶々」、「三遊亭柳枝」公演。6 日～、箱崎東宝で「楽劇・青春地帯」公演。8 日～13 日、大橋劇場で「尾上多見蔵一党」公演。9 日～12 日、春日原映画劇場で「市川右団次」公演。10 日、福岡劇場が専属（第 2 期）舞踊生徒募集。11 日～、柳橋劇場で「佐々木代志丸一党」公演。11 日～13 日、福岡劇場で「中山悦子一行」公演。西日本映劇で「青春地帯」公演。多門座で「廣澤多見蔵一行公演」。12 日、GHQ が「闇の女」を一斉検挙。14 日～16 日、大博劇場で「坂東好太郎」他公演。福岡劇場で「ニュー・グランドシヨウ」上演。14 日～18 日、大橋劇場で「ムーランフリーとその楽団」、「人生劇団と楽団幌馬車」合同公演。共楽亭で「東西名流大会」開催（「春風亭柳枝一行」他出演）。17 日、九州初の放送討論会（第 10 回「現下都市は農村に何を望むか・現下農村は都市に何を望むか」）が西日本新聞社講堂で開催（22 日に全国放送）。17 日～19 日、大博劇場で「大阪文楽人形浄瑠璃」公演。17 日～19 日、福岡劇場で「ふるさと」、「オペラ座」公演。西日本劇場で「石井春瞳の漫談と映画物語」公演。19 日・20 日、「戦災国民学校復興資金募集・映画の会」が西日本新聞社講堂で開催。20 日、「藤原義江・城須美子演奏会」が九大医学部中央講堂で開催。20 日～、大橋劇場で「江見三郎一党」公演。20 日～23 日、大博劇場で「梅澤昇・梅澤龍峰一座」公演。20 日～23 日、福岡劇場で「音楽祭典」開催（「ニュースキングバンド」他公演）。20 日～29 日、共楽亭で「東西落語競演会」開催。21 日、極東軍事裁判の法廷で日本紙芝居協会の佐木秋夫が紙芝居「日本は戦争してゐる」を実演。戦時映画「非常時日本」も上映。23 日～、多門座で「玉川成太郎一</p>

	<p>党」公演。23日～30日、柳橋劇場で「三河家桃太郎大一座」公演。24日～26日、大博劇場で「灰田勝彦・灰田晴彦」他公演。24日～30日、「福岡花月劇団」が大博劇場において6月公演。演目は「まげものコミックオペラ 遠山の金さん」、「現代劇 洗濯屋と詩人」、「豪華シヨウ 夏のおどり」。宮城宴芸社の宮城楽劇団が「ミュージック・コメディアン 宮城ヒデオ」、「異色舞踊 森鈴子」、「少年歌手 吉野三郎」の公演。25日、熊本の劇団文芸座が第2回公演として、チエホフ作「結婚申込」、伊馬鶏平作「或る焼跡の神話」を、26日～27日に菊池寛作「父帰る」、徳富蘆花作「灰燼」、メリメ原作「マテオ・ファルコネ」を、28日～29日には霜川遠志作・演出の「弟子丸家の人々」(原稿200枚以上、上演時間4時間)1本立てを上演。26日～28日、福岡劇場で「メリーゴウランドショウ」上演(「李今鳳と其の一行」他公演)。27日～29日、大橋劇場で「女澤正」公演。29日・30日、「戦災国民学校復興資金募集・西日本新人歌手選定・素人のど自慢大会」が西日本新聞社講堂で開催。29日・30日、福岡劇場で「大家競演大会」開催、「京山華千代一行」公演。30日～、共楽亭で「東京落語競演会」上演(「三遊亭圓楽」他公演)。30日～7月6日、大橋劇場で「さくら富士子一党」公演。楽劇団ニッポン・アサヒ(提供・馬場興行部[福岡市箱崎町])が「楽しいお芝居と素晴らしい歌と踊り」を謳って公演。再建座(福岡市千代町電車交差点角)が「花沢章と其の楽団」、「森雄二郎と其の一党」(名子役・井筒ルリちゃん、三原新太郎が参加)の公演。31日、柳橋劇場で「江味三郎・里見順子一党」公演。この月、「九州演劇」(昭和21年5月)の「芸能通信」は「西日本芸術研究所では舞踊研究生を前川繁尚(洋舞)木村壽美(日舞)指導の下に訓練を重ねて来たが、近くその第一回発表会を開催」と報じている。前期までに、福岡市内では「映画ニュース」、「映画タイムス」、「スクリーンセントラル」(アメリカ映画紹介紙)が発行されていた(ともにB4版の両面印刷で粗雑なザラ紙などを使用)。半月ペースで発行され、映画館プログラムのない時代の新作映画紹介に役立った。月刊「映画芸術」(京都・星林社)創刊。</p>
昭和21年7月	<p>1日、福岡市役所内に図書室が設置され一般公開(昭和22年4月段階の調査で、蔵書冊数約6500冊、貸出利用者、1日平均120人、閲覧室利用者、1日平均20人)。1日、多門座で「阪東多門一座」公演。1日～、大橋劇場で「博多淡海一座」公演。1日～3日、柳橋劇場で「再建新日本・浪曲大会」開催(「天中軒観月」他公演)。3日、東京でダンサー組合が結成され3000人余りが参加する。4日、在福MP司令部がアメリカ独立記念日を祝して市中を機動行進。4日～、聚楽映劇で無声映画週間。大正末期の九州で総帥といわれた弁士・桂大正が率いる一隊による「験の母」(千恵蔵プロ・昭和6年)、「己ヶ罪」(松竹・昭和5年)上映。博多における、その後の無声映画巡業隊ブームのきっかけとなる。4日・5日、柳橋劇場で「甲木悦子と其舞踊」、「楽星・レッドスター」公演。4日～6日、高宮映劇で「松竹スターとコロムビア歌手競演・純情二重奏」上演。5日、「夕刊ひろしま」が原爆投下直後の広島の写真3点を初めて掲載。6日、国名を「大日本帝国」から「日本国」へ改称。6日・7日、柳橋劇場で「高峰三枝子」他公演。8日～、吉塚映画劇場で「新太陽楽団」公演。8日～、福岡劇場で「西村正人一行と其の楽団」公演。8日～13日、柳橋劇場で「さくら劇団」(さくら富士子／春日新九郎、さくら劇団出演部は大分県宇佐郡柳ヶ浦町にあり、事務所は八幡市折尾町の折尾劇場内となっている)公演。8日～12日、西村正人一座が福岡劇場で公演。「九州演劇」(昭和21年8月)の「九州公演演劇映画批評」は、「はなやかなりし曾ての川丈調の名残りを感ずるのは、西村正人、弓矢八万、間君代の三人の芸が、今日まで何の進歩をも示さないといふ歴然たる証拠ではあるがながい巡業生活の中に這入つてゐれば大部分は卑しく荒み切つてしまふのが常の芸人の中で、とも角も危ない所で喰ひ止めてゐるのは流石に川丈時</p>

	<p>代の良き指導者に鍛へられ獲得したものの根強い教養の力であらう。しかしマゲモノ「露路裏物語」現代劇「お駒才三」の二本ともに戦時以前の虫干しのくり返し演劇に過ぎないし、演出方法にも何等見るべき感覚の新らしさは無い」と評す。8日～14日、大橋劇場で「永久座」公演。9日、東宝映画九州支社が映画「僕の父さん」を物語劇とし（脚色・演出は雨宮毅）、福岡放送局から放送（放送者・藤樹豊）。9日～、姪浜劇場で「近江勝東京進出記念・浪曲大会」開催。10日、「素人のど自慢大会」決勝が大博劇場で開催（九州・山口に向けて中継放送）。11日～、西日本映劇で「松島詩子」他公演。11日～、朝日館で「福岡花月劇団」公演。11日～、箱崎東宝で「大魔術・松旭齋天星」公演。11日～14日、大博劇場で「金井修」公演。13日・14日・20日・21日・27日・28日、自由大学「近代思潮」講座（自由人協会、西日本新聞社主催）開催。14日、共楽亭で「春風亭柳橋」他公演。14日～、柳橋劇場で「南條隆一党」公演。14日～20日、福岡文化協会主催の講習会が西南学院講堂で開催。15日・16日、福岡劇場で「玉川勝太郎」公演。15日～17日、渡辺通四に日新映劇（セントラル系アメリカ映画封切）開館。多門座で「梅澤龍峰・梅澤昇一座」公演。15日～21日、大博劇場で「一心座・若宮香太郎」公演。17日～21日、福岡劇場で「中條喜代子一座」公演。18日～箱崎東宝で桂大正による無声映画「瞼の母」、「己ヶ罪」、「摩天楼」（日活・昭和5年）、上映。18日～、聚楽映劇で「福岡花月劇団・花組」公演。18日・19日、多門座で「金井修大一座」公演。19日、東京で「マッカーサー元帥に感謝する盆踊り」開催。21日～、共楽亭で「東西落語名人競演会」開催（「柳家小さん」他出演）。21日・22日、大博劇場で「大倉劇団」公演。23日～27日、多門座で「はかた劇団」公演。24日、共楽亭で「東西落語名人競演会」開催（「柳家小さん一行」出演）。24日～、福岡劇場で「歌劇座」第1回公演。24日～28日、大博劇場で「福岡花月劇団」公演。25～26日、八幡の青春座が第2回公演で「ママ先生とその夫」（岸田國士作）、「春の記録」（亀屋原徳作／鶴岡高演出）を上演。26日、姪浜劇場で「ミスワカナ・玉松一郎」、「銀の星」公演。27日・28日、福岡劇場で「ミスワカナ・玉松一郎」、「銀の星」公演。29日～31日、福岡劇場で「大谷日出夫」公演。31日～、朝日館で「福岡花月劇団・花組」公演。九州地方鉱山局が文化協会を設立し、その演劇部として鉱山移動劇団「福鉱」を結成。大分県臼杵町に有限会社・臼杵文化社が設立され、演劇部総務に「九州文学」同人の稗田豊が就任。長崎市新地町七番地に劇団「かもめ座」が誕生。熊本「文芸座」がレパトリーを発表。第3回夏季公演は宮沢賢治週間として「飢餓陣営」、「グスコウ・ブドリの伝記」、「風の又三郎」を、第4回公演は「黒鯨亭」（原名マリウス）、第5回公演は「続黒鯨亭」。鹿児島市に新劇研究会の劇団「白蝶座」（鹿児島市武町白雲荘内）が誕生。下関市に「下関演劇集団」が誕生し、「息子」（小山内薫作）、「月夜寒」（三宅大輔作）、「日和山付近」「生きてゐた人」（山口素一作）を上演。歌劇座は福岡劇場において「僕は公爵」（竹田新太郎作）を「或る日の殿様」と改題して公演。この月、朝日新聞社西部本社が「月刊文化聯合」創刊（12月まで全5号発行）。その他、月刊「映画制作」（映画世界社）、同「映画芸術」も発行。</p>
昭和21年8月	<p>1日、福岡県立跡地に新天町商店街公社開業。1日～10日、柳橋劇場で「女流剣戟の王座に行く三条美智子と其一党」（昼夜2回演題替り）公演。1日～10日、大橋劇場で「周船寺八郎一党」公演。1日～9日、多門座で「南條隆とその一党」公演。1日～5日、福岡劇場で「清水かほるとニューフオントカミツク楽団」公演。1日～4日、大博劇場で「歌劇座」公演。1日～4日、聚楽映劇で「素人舞踏新作発表会」開催。1日～3日、吉塚映劇で「はかた劇団」公演。1日・2日、姪浜劇場で「大谷日出夫」公演。4日～9日、共楽亭に「都家かなめ」出演。5日～、メトロポール・キャバレーがダンスホールを一般開放（12時～16時）。5日・6日、大博劇場で「廣澤若菊」、「美</p>

	<p> 荅軒麗花」公演。6日、市内に占領軍専用電車が運行開始。6日～10日、福岡劇場で「歌劇座」公演。7日、「九州音頭」新作発表会が西日本新聞社講堂で開催（作詞・サトウハチロー、作曲・細川潤一）。8日～、西日本映劇で「福岡花月劇団・花組」公演。9日、東京バレエ団、日本で初めて「白鳥の湖」を上演。10日・11日、17日・18日、「世界近代文学講座」が西日本新聞社三階講堂で開催。11日～14日、福岡劇場で「伏見直江一座」公演。11日～16日、柳橋劇場にて「少女剣戟界の明星長谷川モ、子一座」（昼夜2回演題替り）公演。11日～19日、共楽亭で「お盆名流特選競技会」開催（「柳亭痴楽」他出演）。12日、「九州音頭発表会・唄と踊りと軽音楽の夕べ」が大名国民学校校庭で開催。13日・14日、多門座で「芸能楽劇団」公演。14日～18日、大博劇場において福岡花月劇団の公演・怪談大会（演目は、「現代劇 生れ変つた幽霊」、「時代劇 怨霊皿屋敷」、「舞踊詩 妖猫伝」、「豪華シヨウ 見世物往来」）。14日～、聚楽映劇で桂大正による無声映画「蛇の目定九郎」（市川右太右衛門プロ・昭和11年）、「チャップリンの放浪時代」（アメリカ映画・大正5年）上映。15日、大福岡発展研究会より永野民次郎編『復興ト人（大福岡の全貌と名士録）』発行。15日、西日本映劇で「青春地帯」お盆特別公演、「スキング・アメリカ」上演。15日・16日、大橋劇場で「伏見直江一座」公演。15日～18日、福岡劇場で「河津清三郎一行」公演。15日～25日、多門座で「阪東多門」公演。17日、吉塚映劇で「はかた劇団」公演。17日～20日、柳橋劇場にて「映画大スターの豪華実演」（松竹・飯田蝶子、松竹・吉川満子、大映・黒田記代、松竹・松井潤子、松竹・奈良真養。演目は「恋の街角三景」、「名人競演祭」、「愛すればこそ」）公演。20日～29日、共楽亭で「関西落語界の重鎮競演会」開催（「浪速家市松・芳子」他出演）。21日・22日、柳橋劇場で「少女浪曲界の女王 鈴木照子」公演。22日～、箱崎東宝で「菊美舞踊発表会」公演。22日～、朝日館で「福岡花月劇団・花組」が「想ひでの主題歌集」公演。22日～、西日本映劇で「物言ふ人形 チャツカリ坊や」公演。23日・24日、柳橋劇場で「西ニッポン楽劇団」公演。23日・24日、福岡劇場で「廣澤若菊」、「芙蓉軒麗花」公演。25日～31日、柳橋劇場で「美男剣戟王 団十郎劇 中村好太郎一党」公演。26日～30日、多門座で「矢野大サーカス」公演。28日、性病対策のため、初の全国一斉街娼取締りが実施される。28日～、国際映劇がアメリカ映画専門館となり「旋風大尉」（昭和20年）上映、1週間で42000人を動員。28日～、太陽映劇が冷房を完備。話題作「肉体と幻想」（アメリカ映画・昭和17年）の登場とあいまって大入り。29日～、箱崎東宝で「福岡花月劇団・花組」公演。29日～31日、福岡劇場で「森川信と新青年座」公演。31日～、共楽亭に「神田山陽」他出演。この月、九州地方商工局石炭部（主唱）、九州地方鉱山文化協会（主催）、放送局・九州演劇社及各新聞社（後援）で「炭砦復興歌詞」の募集開始。長崎市の劇団「かもめ座」が第1回公演で「女かた」（森鷗外作）、「鯨」（ユウジン・オニール作）を上演。理研映画株式会社九州支部（福岡市片土居町 平和ビル3階）が娯楽短篇として「民謡の旅 第一輯」、「お好み演芸大会」を封切。洋画専門の封切館「日新映画劇場」（福岡市渡辺通4丁目）開場。日本演劇人組合が演劇の上演料、演出料に関して試案を提出。「西村正人と其の楽劇団」（久留米市東町479 堤虎雄方、「軽演劇界の至宝」として弓矢八万、間君代の名前が広告されている）が軽演劇公演（演目は「新雪軽音楽団」、「ニシムラダシンギチーム アコーデオンと歌」（野田喜一）、「歌手 北島雅雄・青葉みのり」）。「青春座」（八幡市）が「全くの素人」であることを第一条件として演劇部員を募集。「近代映画」が広告を出し、九州地方のプレイガイドとして岩田屋、玉屋、復古堂、天野屋写真屋を指定。山口市に「山口県演劇研究所」が設立される。所長は「我が愛の記」で有名な山口浩一。顧問・飯塚友一郎、若月紫蘭、伊藤理基、所長・山口浩一、主事・山本秀一、岩永恒人、山口素一、文芸委員・三好十郎、八木隆一郎、 </p>
--	---

氏原大作、山口浩一、演出委員・豊田四郎、雨宮毅、山口素一、演技委員・遠藤慎吾、小杉勇、水谷八重子、大日方伝、植野勇、美術委員・望月孝丸、森蘭男、福井武。事務所は山口県庁内社会教育協会内 山口県演劇研究所。日本民主主義文化聯盟は、理事長・中野重治の辞任に伴い、大村英之助が理事長に就任。村山知義は理事に就任。なお、同聯盟は東宝、松竹、大映が興行的見地より配給を拒否した歴史的記録映画「日本の悲劇」を巡回映写することを決定するとともに、勤労者文化学校を開校。福岡放送劇団が第3回公演（演目は「銀簪」）。「九州演劇」（昭和21年8月）の「受贈雑誌」欄には、「演劇ペン」（東京京橋築地4-2 京橋ビル 演劇ペン倶楽部）、「芸林」（東京渋谷緑ヶ丘1）、「松竹」（東京京橋新富町3-7 松竹事業部）、「新風」（京都市左京区浮土寺西田町100 新風社）、「文化人」（大阪市北区梅ヶ枝町89 関西文化人倶楽部）、「午前」（福岡市渡辺通3 南風書房）、「演技研究」（神奈川県葉山町一色2289 演技研究社）が紹介されている。月刊「映画春秋」（映画春秋社）刊行。小山一義が「炭砒芸能論」（「九州演劇」昭和21年8月）において、「終戦後、演劇の持つ指導性娯楽性及び啓蒙性を活用し、炭砒従業員の教養の向上に智識の啓発に、又日夜激しい労働に従事する人々に、豊かなる歓喜と明日への勤労の糧としての慰安娯楽に又炭砒文化と地方文化交流の一環としての役割を果すため発足活躍してゐる劇団に黒十字劇団がある。目下本劇団は労働組合法制定の趣旨徹底と条文の解説を主題とした劇をもつて、炭砒から炭砒へと巡回してゐるが、今回は特に炭砒素人演劇団の共同出演を図ると共に、未だ演劇グループのない職場に、演劇への関心を高め急速に職場劇団の結成の萌芽を企図する為炭砒従業員中より極力出演方を計つてゐる。／黒十字劇団の名称は未だ、仮の名であるし、その構成も甚だ未完成ではあるが、炭砒芸能確立の推進劇団としての今後の活躍は非常に期待されてゐる。我々は、此の際炭砒演劇の方向に一分野を画する本劇団の内容強化に対し、広く関係者の援助協力を仰ぐものである」と説く。また、雨宮毅は同号の「編輯後記」に、「○「九州演劇」に対しての種々の批判をきくとその大部分は、余りに高踏すぎると云ふ。殊に巡業剣戟劇団では、問題視してゐないとうそぶいて、その実、好意ある取り上げ方をしてくれさへしたなら、でき得る限りの援助もし、発行部数も増加するだらうに、と云ふのである。恐らくかうした心で、己れに傷手を受けず、空虚な温床に浸つてゐることに吸々たるのが、何れもの商業演劇人の生態であらう。——止み難い怒りに五体くだけ散る思ひを如何することもできないのである——敗戦日本の再建への道は、今こそ純粹無垢なる孤独に徹することによつて、自らの誤謬を、汚辱に満ちた己れの悪血を、放出しつつしてはじめて含羞と忍耐の上に、魂の故郷を築かんと願ふ人間再生の投影を、矜持を得ることなくしては、真に文化国家の建設も成り難いもの、やうに私には思はれるからである。○世間の一部から白眼視される、それに一つ一つの解明を与へて行くことは、個人の文学者として或ひは立派な態度とは云へないのかも知れないが、矢張り私はこの雑誌の責任者として、商業劇団のこの悲しい現状に峻烈たる戦ひを挑まなければならないのである——束縛を解かれたといふことが、いやしい痴呆劇をやることか、或ひは過去軍国主義への際物的揶揄劇をやることか、或ひは出鱈目なエロ劇、過去に上演禁止されてゐたもの、陳腐な乱闘劇、個人芸の横行であるべきものかと——まことの自由とは、ひそやかにして美しい人間信頼の反省と苦悩に裏打ちされた、現実直視に依つて創造される、奔放な生命の創造であり、新らしい息吹きの演劇であるべき筈なのである。しかしながらそこには、正しく深い考察と行動への批判を確保しなければならないことは云ふまでもない。見事なるその根底を築き上げるためにこそ、「九州演劇」の使命の重大さがあり、寄席文化人の大いなる要請の言葉と方途が吐露されつゝあることを凝視して欲しいのである。勿論そこには過去の文化一般が大都市に偏して繁栄してゐたために、

	<p>地方生活は全く荒涼たる有様であつたこと、併せて永い戦時中の空白に依つて、一層地方に於いては文化の浸透におくれ、その人間生活は枯渇し、空虚なる生活文化の現状にあるため、その具体的演劇の方向示唆が、単なる理想表現に止まつて生活と遊離した失敗をも引き起さざるやう努力を惜しまないつもりである。切に御協力を願つて止まない」と記した。福岡庶民劇場が福岡放送劇団との交流関係を清算して事務所を春吉花園 1665 番地・原田方に移し、古海卓二、原田種夫、雨宮毅の書き下ろし戯曲の上演を決定（「九州演劇」昭和 21 年 7・8 月より）。</p>
昭和 21 年 9 月	<p>2 日、接待所などの転換に関する通達に基づき、集娼地域を警察の監視下に置く「赤線地帯」が成立。9 日、東京有楽座において、新演技座の長谷川一夫・山田五十鈴共演による「藤十郎の恋」他 2 本が上演される。福岡市に福岡演劇研究会（事務所は筑紫郡筑紫那珂町大字竹下 前田方）が結成され、第 1 回の試演会開催。演目は「怒濤」（森本薫作）、「犬」（チエホフ作）。西日本新聞社文化部が「新日本の演劇復興のため真に民衆に親しまれる清新卓抜にして建設的な息吹と美を盛上げた意欲的脚本を広く大衆の中から募ることになった」として、「懸賞新劇脚本原稿」（一幕物、400 字詰原稿用紙 50 ～ 70 枚）を募集。選者は土方与志、金子洋文、村山知義、真船豊。作品の条件は「一幕物 斬新にして時代の感覚に触れ、且つ素人の劇団に於ても容易に上演可能なもの」。「九州演劇」（昭和 21 年 9 月）の「芸能通信」に、「劇作家野村政夫氏は今度図書出版明星館の顧問兼編集長に就任、季刊誌「芸能研究」を発行、芸能指導趣味雑誌としての方向をとる。所在地埼玉県大宮市盆栽町一四七五 野村政夫方」とある。また、同誌 10 月号「編集後記」で雨宮毅は、「中央に於ける「文部省社会局」「日本映画演劇労働組合」「新演劇人組合」「文芸家協会」等のやうな強力な集団組合が今こそ地方演劇文化向上に注目してその積極的な指導方法に乗り出すべきではあるまいか。勿論、地方としても他力本願ならぬ、待つあるの姿勢を築き上げて置くべきことは言ふまでもない。日本全体の演劇文化復興への唯一の道として」と述べている。29 日、悲劇「香妃」作曲中の山田耕筰が「山田耕筰作品音楽会」（西日本新聞社、福岡音楽協会共催）のため来福。</p>
昭和 21 年 10 月	<p>1 日、名古屋で復興祭開催。1 日から、東京新宿ムーラン跡へ佐々木千里主宰の劇団「小会議」が結成発足。文芸部には中江良夫も参加。「九州演劇」（昭和 21 年 10 月）の「芸能通信」が「日本青年演劇聯盟では今回、自立演劇叢書出版を計画、関係方面に通達した。同叢書は第一期十巻とし各巻一乃至二篇を収め一篇は上演手引共五〇枚前後及び百枚前後（四百字詰）とする。同叢書に依る収益は原稿料（一枚十円）編纂費を除き日本青年演劇聯盟の資金とする。尚くわしくは東京都京橋区銀座西八の三 日本青年演劇聯盟内書記局宛に問合せのこと」と報じる。また、同「芸能通信」には、「大辻司郎、伴淳三郎、高瀬実乗、岸井明、藤尾純、横尾泥海男、飯田蝶子、吉川満子、武智豊子等の喜劇俳優諸子と文芸部に斉藤寅次郎、山本紫郎、佐谷功が集り「喜劇人クラブ」を結成した。事務所は東京都京橋区銀座五、小川旅館内」、「先頃東京九段中学で行はれた都社会教育課主催の第一回農村演劇コンクールの入選は左の如く発表された ○東鉄演劇クラブ（脚本斉藤弘作「裸の点描」）、○関東配電演劇研究会（脚本村上元三作「青雲亭」）、○並木座（脚本阿木翁助作「冬の星」）、○志村青年団演劇部（脚本岡田禎子作「牛の仔」）、○都経済局演劇班（脚本三好十郎作「稲葉子僧」）」といった記事もみえる。6 日、福岡市に芸能を語るグループとして好劇家たちの「博多芸談会」が誕生。佐々木滋寛、西頭三太郎等が発起人になって、当日、総会を開き、会則なども決定。事務所は福岡市大学通五丁目、松源寺内。同年 11 月現在の会員は相浦勝、葦名要、安部久、安部特助、雨宮毅、生田卯一郎、己城正二郎、加藤藤次郎、河原田健次郎、木村節夫、小島与一、蔭野増雄、佐々木滋寛、新宮大三郎、竹若啓次郎、田中諭吉、寺田弘、</p>

	<p>中村巖、西頭三太郎、野村久壽郎、野村文助、中島淳吉、深見龍一郎、元満亥之助。福岡放送劇団は第4回公演作品として小山祐士作「春の声」改題「秋の声」を進仁の演出で放送と決定。八幡市の創作座の第1回試演会が10月下旬に開催と決定し、オニール作「鯨」改題「北極海」を吉村草三の演出、真船豊作「小さき町」を徳永瑞夫、下久保室平が協同演出する。三帆書房が映画総合雑誌「映画展望」を創刊（B5版で表紙とも60頁、定価は5円）。当時、市内にはB4版のザラ紙に両面印刷した「映画ニウス」（執行常雄編集）、「映画タイムス」（長尾大太郎編集）、「スクリーンセントラル」（豊津修編集）、「九州映画新聞」（神森保彦編集）などの映画情報誌、「現代人」（青沼健郎発行）などの評論紙（横長模造紙を三つ折り、四つ折りにしたもの）があり、福岡市および北九州の5市を中心とした映画館や書店で手にすることができたという。福岡放送劇団が第4回公演（演目は「秋の声」）。若松に河原重巳を中心とする劇団「鷗座」設立。第1回公演は「地獄教由来」、「吃又の死」。宮崎に宮崎新劇研究会発足。第1回公演は「春星夫婦」。10日、共楽亭で「東西落語競演会」。10日、多門座で「文芸浪曲・酒井雲」公演。10日・11日、福岡劇場で「九州／関東 拳闘対抗大試合」。10日～、朝日館で「福岡花月（月組・花組合同出演）」公演。11日、綱場町商店街が復興開店（委員長・野村久十郎、42店舗）。13日～22日、第2回・西部美術展開催（西日本新聞社講堂）。15日、新天町商店街落成。完成した商店街は木造瓦ぶき2階建てが東西に4列12棟、建て面積約70㎡の店舗が74戸と約36㎡の店舗が8戸、250店の希望者のなかから審査を経て合計82店舗（77店主）が入居した。15日、東宝を中心に日本映画演劇労組、ストライキ突入（第2次東宝争議）。15日～17日、新天町開業記念「新天まつり」開催。戦後初めて復活した福引が人気をよぶ（1等花器、2等鉄瓶、3等真鍮製火鉢、4等お盆、5等台所用品）。抽選会場には松竹映画スターの佐野周二が招かれた（出演謝礼は Cutter シャツ2着）。16日・17日、柳橋劇場に佐野周二他来演。18日～20日、新天町商店街が戦後初の「誓文晴」売出し。30日、福岡劇場において九州地方新劇劇団熊本文芸座および八幡青春座の福岡第1回公演が開催される。文芸座は三好十郎作「稲葉小僧」（演出・霜川遠志）一幕を、青春座も三好十郎作「崖」（演出・鶴岡高）を上演。「九州演劇」（昭和22年1月）の「福岡公演々劇評」は「この新劇公演は最初にしても、余りに失敗しすぎたと云ふ結論になる」と記している。20日、ストライキ中の映画二社の労組が東京の後楽園で「芸術復興祭」開催。九州地方鉱山文化協会が、約800篇の作品のなかから「炭鉱復興歌詞」（選者は「九州文学」同人諸氏）、炭鉱復興の歌、明朗炭鉱節、石炭感謝の歌、石炭祭の歌、それぞれに当選者を発表。「炭鉱復興祭」（九州地方鉱山文化聯盟主催、日本移動演劇聯盟、九州演劇社、福岡放送局及び各新聞社後援）は、10月～11月の2ヶ月にわたってキングレコード一流芸人及び松竹少女歌劇団の絢爛豪華な出演と炭鉱人の多彩な職場演芸の絵巻物を展開。全九州鉱山の「鉱山演芸コンクール」も企画され、劇、歌謡曲、踊、楽団演奏の四種目について審査委員を銚衝（「九州演劇」昭和21年10月「芸能通信」より）。福岡プレイガイド社・山崎晋良は全福岡各層を網羅する福岡文化人クラブを結成するために、各関係者に運動を開始することになった。同クラブは、経済的不如意のため文化活動を制約される有能文化人を後援し、以て真の文化を大衆の中に浸透せしめようとするもので、九州演劇社、福岡日新映画社の協力を得ることになっている。月刊「テアトロ」第2次（河童書房）刊行。</p>
昭和21年11月	<p>1日、雑誌「アメリカ映画」（編集・飯島正）創刊。1日～10日、大阪復興祭開催。新柳町に朝日劇場、福岡劇場、柳橋劇場が、渡辺通四丁目に日新劇場（のち新歌舞伎座）が開場。8日～12日、福岡大博劇場新築最初の公演として松本幸四郎一座が来演。幸四郎劇団幹部総出で演目も新古演劇十種のひとつ「茨木」を加えた5本立てだった。「九州演劇」（昭和22年1月）の「福岡</p>

	<p>公演々劇評」には「瀬川如皐作「与話情浮名横櫛源治店妾宅の場一幕では、向疵の与三郎を海老蔵、蝙蝠の安五郎を幸四郎、和泉屋多左衛門を三津五郎、横櫛お富を芝鶴……その他であつたが、七十七歳の高齢とは思へぬ幸四郎の精力的な活躍は此の様な世話物に於いても充分な演技を見せ、殊にその芸の細かさが壺を突いて小気味よく、表情のユーモアも手に入つた洗練を裏づけてゐると云つてよい」と記している。9日、西鉄文化会発会式開催。「西鉄文化会設立趣意書」には、「終戦後既に一ケ年。戦ひ敗れたる日本にとつて唯在るものは飢餓と、混乱と頹廢せる道德の蔭に日毎累増する社会悪のみ。／此の混迷せる世相に直面し、祖国日本を救う唯一の方途は真に民主主義に徹したる平和なる文化国家を建設するより外にはない。／今や祖国再建に目覚めた若人達は焼落ちた瓦礫の中から、荒廢した草叢の蔭からはだか一貫雄々しく立上つた。今日も亦燎原の火の如く燃えさかる全国各地の青年文化運動の現実を凝視せよ！ それは単に好奇や自己満足の為の方便からではない。暗い生活の中から、日々の現実の中から、この苦境を転じて生活の樂園たらしむべく日本文化建設と言ふ意欲となつて生れたものだ。いばらの道を切拓く熱汗こそはやがてそこに理智の光を我々に与へてくれるを信ずる。／歴史は教へる——偉大なる政治も宗教も、将亦文学も芸術も、それは真にドン底に呻吟した国民の手によつて打建てられたことを——その為には吾々の一人々々がもつと真剣に文化創造の担ひ手とならなくてはならぬ。それは他人ごとであり得ない、その文化の殿堂を開く鍵はたつた今、吾々自分の手に握られてゐるのだ。／斯くして吾々は微弱たりとも、自己の職場を通じ、西鉄人の情操と聡明なる智慧から湧出づる西鉄文化運動の種子を蒔くべく立上つたのだ。茲に西鉄文化会の設計を計画した。幸ひ諸兄姉の絶大なる御賛同を得てその第一歩を踏出すことを得ば喜びこれに過ぎるものはない。奮つて御賛同あらんことを切望する。／昭和二十一年十一月二日 西鉄文化会各委員」とある。同会は、会誌「西鉄文化」を発行したほか、定例研究会の隔月開催、政治経済部・文学部・芸術部の各部が講師を招いての討論会開催、各種座談会の開催、各文化団体主催の文化行事への参加などの活動を行った。13日、多門座で「拳闘大試合」。13日、大河内伝次郎、原節子ら、東宝スト反対声明を出す。14日、多門座で「大浪曲 鼈甲斎虎丸」公演。15日、東京・池袋で日映労組組合員が「闇の女」と誤認され検診を強制される。1000人余りが抗議デモ。15日～18日、「人気歌手と音楽大集団ジャズまつり」公演。20日～、前進座が「レ・ミゼラブル」の全国巡回公演を開始する。20日、佐賀「新劇研究会」が第1回発表会を昼夜2回興行で開催（演目はチエホフ作「熊」、結婚申込、鶴丸光行作「奔流」の3本立て）。宮崎県の都城芸能文化協会劇団「自由座」第1回公演（演目は有島武郎作「ドモ又の死」、山本有三作「津村教授」の2本立て）。20日～23日、朝日館で「村上義章と新楽劇団」公演。21日～、西日本映劇で「如月俊夫と楽団ホープ」公演。22日、東京・日本橋の三越ホールが開場。22日～26日、大博劇場で東京大歌舞伎「市川猿之助大一座」公演。23日、東京自立劇団協議会結成（105劇団が加盟）。25日、山口県社会教育協会の山口演劇研究所が県下の小鯖村禅昌寺において第1回公演（演目は小山内薫作「息子」、山本有三作「嬰兒殺し」、八木隆一郎作「湖の娘」の3本立て）。大映東京撮影所では、募集したスター候補応募者3千数百名から厳選の結果、男8名、女12名の合格をみたが、いずれもスター候補には該当せず、全員研究生として採用決定。同研究所修学期間は向こう4ヶ月で、講師は田中栄三（演技基本）、仲木貞一（東西演劇）、水品春樹（同上）、八田元夫（演技指導）、安達富代（律動体操）、牛原虚彦、田中重雄、小石栄一（映画演技）、橋本国雄他（音楽）、その他技術部（キヤメラ）、録音等。なお、このときの研究生合格者は、上野和男、高橋隆、渥美掬、市川喜一、塚田靖彦、船越栄二郎、中野博、滑川輝子、北国照子、深沢延子、村井百合子、岩城智以留、小岩井敏子、</p>
--	---

	宮下雅文、沢田信子、高梨登志子、小野洋子、阿部初子、関千恵子、秋山節子。29日、東京で芸妓連合会が結成される。この月、万町九州日報あとの西日本会館3階ホールが西日本映劇に改装。
昭和21年12月	<p>3日、ラジオクイズ番組「話の泉」（司会・和田信賢）放送開始。7日、女優・マダム貞奴（川上貞奴）死去、享年75歳。8日、朝日館で「村上義章とその楽団」公演。11日・12日、福岡劇場に「新国劇 島田正吾」来演。13日、大河内伝次郎、山田五十鈴らの東宝第三組合が新会社「新東宝」設立を決定。13日、福岡劇場で萩野舞踊研究所（福岡市住吉西本町）が第1回発表会を行った。指導振付は、木塚萩野で、花柳壽春、黒瀬勝子、久保君子等が特別出演した。13日～14日、復興募金のため、福岡女子専門学校校友会主催で女専芸能会を開催（場所は九大医学部講堂。演目はゲーテ作「ファウスト」。脚色および演出は九州演劇社の大内田圭弥が担当）。14～15日、福岡の劇研「ともだち座」第1回公演（「にんじん」、「衣裳」）。都城芸能文化協会劇団「自由座」第2回公演（演目は「紅皿」、「崖」）。福岡市教員組合青年聯盟主催の第1回福岡市内学童芸能コンクール祭を九大医学部講堂で開催（審査は森脇憲蔵と雨宮毅が担当）。都城芸能文化協会の第2回公演開催（演目は火野葦平「紅皿」、三好十郎「崖」）。福岡市市役所の年末職員慰安演芸会として、福岡劇場で昼夜2回の劇、舞踊、歌、歌謡曲を開催。福岡県農業会文化部では九州演劇社と共同編修で「農村素人演劇脚本集」を企画（「九州演劇」、「芸能通信」昭和22年2月より）。劇研ともだち座（スタッフは20余名、組織は文芸部、演技部に分かれ、事務は会員の互選による5名の委員をもって編成する委員会によって遂行されている。委員は岡山貴、福沢正実、藤樹豊、日下皓、倉賀野淑子、仮事務所は福岡市外竹下144 前田方）が、福岡文化クラブを主宰する山崎晋良の絶大な支持と援助を受けて、第1回公演を開催。演目はジュリアン・リュシエール作、原千代海訳「海拔三千二百米」（3幕5場）が決定。16日～18日、柳橋劇場で「座長大会」開催。三河家桃太郎、澤村淳一、梅林良一、若杉健次郎、ひぐち初子、樋口次郎が来演。高橋義信一座、文化座、益田隆、斉田愛子等は「満蒙引揚文化人聯盟」を結成。大阪堂ビル2階に事務所を置き、その第一歩として高橋義信を中心に、30日、大阪中ノ島中央公会堂で引揚作家である秋田実作「春になる雨」を上演。この年の九州演劇界について、「九州演劇」（昭和22年2月）の「巻頭言」は、「昭和二十一年度の九州演劇界は、その職業劇団の興行手法において、なんら注目すべき野心性もなく、低調を極めた。おもてに大衆娯楽の必要なぞと標榜し、従来の卑俗なるテーマに終始した露骨なる商業主義的経営方針は、思想の混乱に侵入してその混乱を助長した他、何ものも追加することは出来なかつた。より高き生活感情への感動と夢。演劇の存在を意義あらしめる凡ては、そこから出発しなくてはならない。／一方、世上の逼迫した経済危機にもかゝらず、多くの新劇団及び職場自立劇団の誕生を見たが、これらもまた、刮目すべき公演を持つことが出来なかつた。その出発の動機が、低俗なる職業劇団に対して、新時代的感覚と意識を付与する立場にあつたにもよらず、このやうな低調なる結果をしか持ちえなかつたのは、徒らに声価ある既成の脚本のみに頼るなぞ安易なる趣味的傾向が濃厚で、新しい困難な時代のさ中に身を投げ、自ら苦悩しようとする自意識が欠如した結果である。趣味をいでぬ人々の舞台が、どうして、人の真心を奪うことができるだろうか。無節操なる無断上演なぞも同じ安易主義による甚しい誤りである。又、職場演劇は、田舎廻り劇団の模倣を絶対に避け、飽くまで厚生的なる文化運動として自主的に行わるべきである。／すべて結果は、さげがたい必然である。／蔓延する社会の虚偽に抗し、偽らない真実追求への強烈なる意欲をひたすらもつ若さのほこりをかけて、努力する喜びをこの新しい年度の決意としたい」と述べている。</p>
昭和22年1月	1日～9日、近代的な劇場として新装なった柳橋劇場で九州剣戟会の彗星「三河家桃太郎大一座」

	<p>公演（昼夜2回）。2日、古川ロPPER座、東京有楽座で正月興行を開催し、「カムカムロッパ」を熱演。11日～、多門座で「新春二番大興行 美男剣雄・三河家桃太郎」公演。11日～12日、松竹スター上原謙をはじめとするスター陣が来演、情熱の歌姫・並木路子とその楽園の歌謡ショー。13日・14日、柳橋劇場で「堀口八重子とキング楽団」公演。15日、東京新宿の帝都座5階劇場で初の額縁スードショーが開演される。15日、新天町で福岡三曲協会が「尺八／琴三絃演奏会」開催。15日、博多芸妓組合（中洲券番）設立。15日～、有楽映画劇場で「服部富子の実演」、「聳入り豪華船」。16日～3月末まで、小玉人形劇（小玉人形劇団九州支部・福岡市警固本町33 九州演劇内）が朝日新聞社企画部内・九州保健婦連盟幹旋で、北九州地区各学校への巡回公演を行う。映画俳優の阪東妻三郎、実演興行、演目は「国定忠治」、「女のいる波止場」、「魔像」。九州演劇社の自立素人演劇指導部が指導部のスタッフを発表。指導員は原田種夫、倉賀野淑子、河原重巳、藤樹豊、望月孝丸、佃一一、霜川遠志、大村順一、中村新、小台三四郎、今史朗、大内田圭弥、森脇憲蔵、雨宮毅、古海卓二、同東京在住指導員は小川丈夫、栗原一登、渡辺渡、利倉幸一、伊藤松雄、協賛は劇研ともだち座、都城市自由座、熊本文芸座、若松鷗座、八幡青春座、後援は日本演劇人組合、日本演劇ペン倶楽部、九州文学社、九州鉦山文化聯盟、福岡放送局、福岡県農業会。17日、東京で美人コンテストが解禁となり、今泉瑠美子（19歳）が「ミス銀座」に選ばれる。26日、小倉放送局では雨宮毅作、河原重巳演出「うたかた」を劇団「鷗座」で放送。27日、福岡市が戦災復興土地画整理事業の認可を受け戦災復興事業に着手。この月、檀一雄が福岡市下西町に転居し、眞鍋呉夫・北川晃二らと劇団「珊瑚座」設立。「私タチ青春ノ徒輩ハコニ集ツテ劇団珊瑚座ヲ設立シヨウト思ヒマス。思フトコロハ旧套陳腐ノ演劇観念ヲ打破シ清新潑刺ノ生命ヲソノママ舞台ニ顕現シヨウトスルニアリマス」（「珊瑚座設立宣言」、「午前」昭和22年1月）と宣言。発起人は伊藤佐喜雄、大坪博、与田準一、大西巨人、檀一雄、眞鍋呉夫、桜井敏郎、北川晃二。後援は南風書房、三帆書房、叡智社、西日本新聞社。八幡市で「九州映画新聞」発行。</p>
昭和22年2月	<p>4日、七世尾上梅幸が東京劇場で襲名披露公演を行う。12日、日本ペンクラブ（会長・志賀直哉）再建。文芸誌「詩と絵」（九州書房）創刊。「九州演劇」（昭和22年2月）の「芸能通信」によれば、西日本新聞社募集の「懸賞新劇脚本」は応募総数405篇にのぼり、現在最終審査中とのこと。最終候補は「焼け跡の月」、「三叉路」、「日暮れ」、「峠」、「豊年祭」、「燠」、「友情」、「新生」、「冬の花」、「猪」、「祖先」、「物言ふ絵」、「野分の家」、「宵まつり」、「ベエトーベンの坊や」、「残暑」の16篇（最終的には、赤塚欣二「冬の花」が一席となり賞金三千円を獲得）。九州大学法文学部演劇部では毎週火曜日に研究会をもち、2月の学生連盟芸能大会上演演目としてヴィルドラック作「商船テナシチイ」の研究を行う。北九州の学生演劇グループ劇団「鷗座」の第2回公演レパートリーは火野葦平作「紅血」、久米正雄作「牧場の兄弟」他、現代劇1本。松尾保一が「浪曲ばなし」（「九州演劇」昭和22年2月）に、「福岡市柳橋劇場に於ける西日本浪曲会結成浪曲大会の幕合で雲井峰月会長の九州より日本の新人出でよの熱弁をきゝ、応ふるにその寥々たるに感慨を禁じ得なかつたのを何としよう。今年は元旦から浪花節二題とし、浦太郎、団十郎の出演放送あり幸先よく、浪曲豊年かと大満悦だが、これら中堅に堂々一騎討する九州の新人はわたしをして云はしむれば、まづ、雲井天晴といったところか、切に諸君の奮励を禱る」と記す。</p>
昭和22年3月	<p>前進座「故郷の声」、「心筑紫恋慕玉取」、「一本刀土俵入」の3本立上演。25日、東京有楽町に初のロードショー劇場「スバル座」が開場。「アメリカ交響楽」封切。入場料は25円と高額だったが、10日間分の前売券が完売。この頃、東京で新人演劇協会が設立され、民主主義日本にふさわしい演劇の創造と普及を目的に演劇活動を行った（のちに福岡支部も設立され、幹事長・望</p>

	月高丸をはじめ、雨宮毅、中野一夫、小台三四郎、肥川治一郎、棚町知彌、原田匡己、広渡常敏、桜井敏郎、瓜生正美らが参加。事務所は福岡市唐人町 96 に置かれた。
昭和 22 年 4 月	2 日～、朝日館で「実演 春の踊り」（シヨウ・白バラ）公演。2 日～、箱崎東宝で「博多二〇加名人大会」開催。8 日、東京・新宿に軽演劇の「ムーラン・ルージュ」再開。初日の演目は山本浩久構成の「スイングショウ」等。16 日、多門座で「巴うの子一行」公演。16 日～、聚楽劇場が「今田実と長井猛の笑いとスクラム 新邦楽劇団」公演。23 日、国鉄で急行列車が復活。東京～下関間が 5 時間短縮される。25 日～ 29 日、大博劇場で「水谷八重子・守田勘彌合同公演」、2 階指定席 35 円、「歳月」と「残菊物語」を上演。28 日、古今亭志ん生、三遊亭円生の満州引揚げを歓迎して、金馬、文楽らが日劇小劇場で「落語五人会」開催。この月、「劇作」第 2 次（京都・世界文学社、隔月）刊行。寿通り商店街（代表・新宮大三郎、62 店舗）が復興開店。この後、下新川端商店街（代表・木原潤二、27 店舗）、川端商店街（代表・小原清三郎、能勢五一郎、51 店舗）がそれぞれ開店する。『福岡市勢要覧 昭和 22 年版』（福岡市役所総務部調査課、昭和 23 年 8 月）には、この頃の商店街の復興状況が「戦前市の銀座街と唱えられていた博多川端、寿通、綱場通の中心繁華街も一夜の爆撃で灰燼に帰したが、終戦後罹災者の復帰と海外引揚者の進出とにより、雌伏僅かに一年、今や有力商店街の復興したもの既に十数ヶ所に及び公認市場九ヶ所一般市場 30 余を数え商況漸く活気を呈しようとしている。／之と併行して日本貿易館九州分館の設置を見、数次に亘る海外バイヤーの来福あり、貿易産業の改善振興を刺激し、一方問屋の復興の為め問屋協会の設立、見本市の開催、問屋街の建築等相次で起り、商業復興に関する諸施設も亦漸く備わりつつある」とある。東公園の旧武徳殿内に占領軍施設図書室（CIE 図書館）開館。日本人一般にも無料公開（蔵書約 3000 冊、400 種にのぼる新聞・雑誌は日曜日、月曜日を除いて 9 時～ 17 時まで自由に閲覧可能）。
昭和 22 年 5 月	3 日、劇団・俳優座、東京の三越劇場で初の新劇公演開始。7 日～、聚楽劇場が「宮城千鶴子とそのブラザー軽音楽団」公演。7 日、箱崎東宝が「吉田進とニュースイングショウ」開催。7 日～、西日本映画劇場で「観光楽劇団 踊るマリオネット楽団」（音楽コント 杉まり・杉ひろし特別出演）公演。14 日～、箱崎東宝で「物言う人形 チャッカリ坊や」、「踊るマリオネット舞踊集団」、「音楽コント 杉まり・杉ひろし」公演。17 日、「西日本新聞」、4 月の映画街、劇場の収入が前月の 2 倍になったと報じる。九州地方工場文化連盟主催、放送局、毎日新聞社後援の第 1 回全九州工場演劇コンクールは全九州から 14 工場が参加し、19 日から福岡地区、北九州地区、長崎地区で開催 24 日終了、中村巖、代木撤兵、西尾示郎の諸氏小生の 4 審査員の慎重検討の結果、入選作品及び受賞者を決定。中村巖「工場演劇コンクール私観」（「九州演劇」昭和 22 年 8 月）は、そのなかから、福岡地方専売局全国煙草労組福岡支部「明けゆく大空」（肥川治一郎）、松居工業株式会社労組演劇部「鉄屑」（原作・八尋敏夫、脚本・林樹一郎）、三井化学工業株式会社三池染料職従組文化部「若き人々」（板井与志多可）、日本ゴム株式会社久留米工場演芸部「黎明」（田中義弘）、日本パルプ飴肥工場（宮崎県）「出発」（佐土原良正）、西鉄小倉工場「復興の息吹き」（小林嘉一）、黒崎窒素株式会社「麦の唄」（西川英一）、安田興行株式会社八幡工場「職長」（藤久勝俊）、三菱重工業株式会社長崎造船所演劇研究会「炭塵」（山口弘）、三菱重工業株式会社長崎精機製作所「更正の朝」（忽那健太郎）、三菱重工業株式会社長崎造船所演劇研究会「汽笛」（研究部）[以上第 1 部]、日本タイヤ久留米工場「父帰る」（菊池寛）、毎日新聞西部本社工務局「裸の殿様」（八木隆一郎）、日鉄八幡工場演劇集団「犬（結婚申込）」（チエホフ）、三菱電機長崎製作所訓育課「四つの柱の家」（斎藤瑞穂）[以上第二部]を紹介している。24 日～、福岡中学校校庭で「全

	<p>国オートバイ競争」、25日、同会場で「大拳闘」（ピストン堀口参加）開催。24～26日、朝日館（新柳町）で「映画誕生50年記念祭」と銘打った無声映画大会開催。花浦新曉、松小路聖、福山隆らの名解説者が登場。福岡の劇研ともだち座が第2回を開催。演目は田中千禾夫作「おふくろ」、菅原卓作「北へ帰る」。八幡浅春座の次回公演予定演目は、太宰治作「冬の花火」、エドモンド・ロスタン作「白野弁十郎」、品川齊作「酒なくて何の己が桜かな」。珊瑚座が事務所を福岡市上店屋町16の南風書房に構える。19日～20日、北九州で結成されたドラマリーグ（八幡の日鉄演劇集団・創作座、青春座、青雲座、若松の鷗座の4座が加盟）が小倉日活劇場で第1回公演（夕刊九州タイムズ主催）。創作座は長塚節作、徳永瑞夫演出「土」、鷗座は八木隆一郎作、吐戸英介演出「故郷の声」、青春座はロベルト・ブラツコウ原作、阿羅田瓢太郎演出「ドン・ピエトロ・カルウソ」、青雲座は小山内薫原作、後藤勝見演出「息子」を上演。24日、多門座で女流浪曲「天光軒満月嬢」公演。24日～26日、朝日館で「無声映画 沓掛時次郎」公開。「グランドシヨウ白薔薇」公演。24日～25日、九州大学医学部主催の演劇祭が九大講堂で開催。「愛と死のたわむれ」、「アルトハイデルベルヒ」、「修善寺物語」を公演。25日～、多門座で「樋口次郎」（樋口初子、東富士子共演）公演。25日、福岡有楽で「塩まさるとゲーコメットアンサンブル 大江戸の鬼」公演。25日、西日本映画劇場で「田中淳一と淳ちゃんグループ」公演。25日、聚楽劇場で「吉田進とニュースキングシヨウ」公演。25日、箱崎東宝で「博多二〇加名人大会」開催。熊本県劇団組合は役員改選を行い、組合長・梅林良一、相談役・南条隆、理事長・松岡又喜、常務理事・牧始、書記長・古井武夫、文芸部長・真木三十一を選出。事務所は熊本市古城堀端町79。組合文芸部は9月末締切で懸賞脚本募集を行うことを決定。引揚芸能人が劇団「新ニッポン」結成との記事あり（「九州演劇」昭和22年2月、「芸能通信」）。劇作家組合書記長の利倉幸一が5月限りで退任し、西川清士が後任となる。利倉はキネマ旬報社から刊行される雑誌「ステージ・スクリーン」の編集にあたる。関西新演劇人協会が以下のような幹事を選出。○桑原輝一、堀江史朗、牧野弘之、○竹屋治三郎、○多田俊平、○溝田道雄、○渡辺三郎、○中西武夫、波岡龍平、○矢追季春、木下ゆず子、高橋正夫、○泉田行夫、志村治之助、吉田太郎、山本明、十朱久雄、○川上越（事務局）、大岡欽治、宅昌一、志摩靖彦、土田智博（○印常任）。この月、月刊「十六ミリ映画」（日本十六耗映画人協会）、月刊「日本映画スタア」（映画スタア社）刊行。</p>
昭和22年6月	<p>1日、福岡県農山漁村文化協会が附属演劇研究科を設置し開所式を行う（会場は福岡県宗像郡宗像神社）。同研究所は県下各地の農漁村の希望者から15名を厳選し、同協会小台指導部長が研究所長に就任した。この研究所では県下一流文化人を講師として農業、経済、農村文化、文学、演劇史などの基本的な科目と演劇の実習訓練を3ヶ月間行っただけで移動劇団を組織し、農漁村の文化向上をめざした。2日・3日、大博劇場で「浪曲大会」（主催・鶴丸興行社）開催。10日・11日、柳橋劇場で「坂東好太郎劇団」（最上米子特別出演）公演。23日～24日、福岡農専は福岡劇場で真船豊作「太陽の子」、星山継人作「三界道路」を公演。30日、7月1日、「文学座」九州公演。森本薫作「女の一生」（演出・久保田万太郎、主演・杉村春子、三田村健、中村伸郎）を上演。</p>
昭和22年7月	<p>三井三池炭鉱で第1回の各坑区演劇コンクールを開催。審査員は九州演劇社の末岡真一郎。入選作品は四山坑の島本新太郎（仕繰工）作「断層」に決定。三帆書房主催で、杉村春子、三津田健、中村伸郎等オールメンバーの文学座が来演。演目は森本薫作、久保田万太郎演出「女の一生」。人形劇の名人・結城孫三郎の名蹟をついで、嗣子・田中清が十代目の結城孫三郎を襲名。9日、文士劇「おでん座」がタロー座で巡業。原田種夫は、「当時「九州演劇」というのを出していた雨宮毅が「酒とともに去りぬ」という劇をわれわれのために書き、これを演出した。結果はさん</p>

	<p>ざんの失敗で、恥をさらしたに過ぎなかった。皆が本名で舞台に出て、本物の酒やビールを飲むという、まことにつまらない芝居だった」（『西日本文壇史』昭33・3、文画堂）と記している。5日、NHK「鐘の鳴る丘」放送開始。10日、雨宮毅が福岡県社会教育委員を委嘱される。12日、藤原歌劇団が東京の帝劇で「タンホイザー」を初演。12日～、西日本映画劇場で「吉田進とニュースイングシヨウ」公演。12日・13日、柳橋劇場で「古賀政男 歌謡大音楽祭」（歌手・近江俊郎、高倉敏、加賀奈緒子、羽山和男、川路公恵、秋月富美子、司会漫談・柳壽美夫、歌謡コント・都上英二、東喜美江）。27日、珊瑚座が第1回試演会開催。「西日本新聞」（昭和22・7・21）「文化短信」欄に、「さんご座第一回試演会 27日午後1時と6時福岡市西南学院講堂、催し物はJ・M シング作「海へ行く騎者」ほか、29日福岡県柳河町大和映劇でも開く」とある。28日、滝沢修、宇野重吉らにより民衆芸術劇場（劇団民芸）が結成される。この月、総合文化協会設立。同協会の機関誌「総合文化」には「敗戦は一八六八年の日本の出発の誤りを明らかにした。そしてわれわれは眼の前の廢墟こそ、われわれの過去のほんとうの姿であつたことを知るのである。あらゆる被ひを戦火にやきつくされたわれわれの生命は、この廢墟のなかではじめて生命の源につきあたる。／われわれの出発点はこの敗戦の底に発見した生命である。われわれはこの生命を真に近代的な生命とする使命を担ふ」（「宣言」、「総合文化」創刊号、昭和22年7月）とある。月刊「舞台」（公文館）復刊。この頃、盛んだった移動公演活動について松尾哲次「移動公演について」（「テアトロ」昭和22年7月）は、「この活動は舞台と観客の二つの面に通常の公演活動とは異なる創造活動と経営方法を導きだす特殊性をもっている。全国の都市と農村漁村で行われるから、通常の公演に比較してより広汎な階層を対象とする。その対象のあらゆる部分に魅力ある演劇をつくらなければならない。これだけでも創造上の大きな制約であるのに、公演の会場が劇場に限られていない、一定の舞台でつづけて公演する場合が殆どない。しかも一定しない舞台で一定の演劇的成果を持ちつづければならない。それに例外はあるが移動するのに便利のように人と物とを仕組まなければならない。そういう制限が更に加えられる。このような制約から移動公演活動に適した演劇形式がつくられる。工場、農村または青年、学生層等の特定の観客を対象とする経営方法がひきだされる。移動公演を専門とする劇団もできてくる」と述べている。</p>
昭和22年8月	<p>1日～、空気座が田村泰次郎作「肉体の門」の上演開始。空前の興行記録を達成する。19日、最後の全国中等学校野球大会で小倉中学校が優勝（九州勢として初）。東宝株式会社九州支社が演芸課を設置し、興行部演芸課部長に中村巖が就任。「物価庁では、九州地方興行審査の適確公正を期して以下の五氏を委員に追加委嘱した。井上精三、古海卓二、木村義男、望月孝丸、雨宮毅」（「芸能通信」、「九州演劇」昭和22年8月）同欄には、「福岡市に今度“福岡協同劇団”が結成された。従来の娯楽劇団と異り、福岡県下の勤労諸団体、及び文化諸団体の確実なる支持を得て、公演に於る観客動員の絶対の安心をもつて民主々義演劇の創造にはげむ専門劇団である。尚この劇団を中心にしてゆくゆくは演劇学校を設立する予定。全九州にドラマリークの母体として活躍する筈である。事務所は福岡市白金町九三／尚、第一回公演の上演予定脚本のうち三好十郎作“稲葉小僧”は作者三好十郎よりの希望によつて取りやめ代りに村山知義作“馬鹿の療治”を上演に決定」という記事もある。</p>
昭和22年9月	<p>この年の秋より、電力不足が深刻になり、国の統制による使用制限実施。映画館も週3日間休館を強いられることになる（その後の協議で「一日六時間、六日間の電力使用で結着」）。4日～5日、福岡県農山漁村文化協会の附属演劇研究所、卒業記念公演開催（福岡市福岡劇場）。演目は「風雪の日（さくら義民伝）」、「種はまかれた」の二本立て。5日、松竹歌劇団のレビュー「アラビアン・</p>

	ローズ」が東京の新宿第一劇場で上演開始。
昭和 22 年 10 月	<p>タマヤシネマ（経営は井上参次、大映封切）が玉屋デパート 5 階に開館。こけら落としは大友柳太郎主演の「逃亡者」。7 日、「火の会」九州公演旅行のため来福。「火の会」は前衛芸術精神によって旧弊な思想文化を脱却し、敗戦後の新文化を創造することを目的とした文化団体で昭和 21 年 4 月 20 日に発会している。詩人の野上彰が提唱し、豊島与志雄、中島健蔵、青野季吉、荒正人、平野謙、小田切秀雄、草野心平、荻須高德、三岸節子、佐藤敬、村山知義、千田是也、近藤忠義らが参加した。同日正午、草野心平、高見順、中島健蔵、佐藤敬、荻須高德らが博多駅に到着し、市内春吉の旅館「碧雲荘」に宿泊。翌 8 日・9 日の 2 日間、九大医学部講堂で公演会を開催。福岡公演の内容は「西鉄文化」第 3 号（昭 23・2）に「アヴァン・ギャルド総合文化講座プログラム」の記事があり、高見順・中島健蔵・豊島与志雄の講演速記が掲載されているが、一方、「西日本新聞」（昭和 22 年 11 月 9 日）の「会と催し」欄にも「○アヴァンギャルド歓迎座談会 九日午前十時から太宰府飛梅村自由学園で」とあり、メンバーが手分けして両方の催しを行ったことも考えられる。16～17 日、福岡県農村漁村文化協会嘉穂飯塚地方部／同胞援護会嘉穂支部主催「嘉穂飯塚郡市芸能大会」（嘉穂劇場／福岡協同座、演目は「落日」、「日本の河童」、「風雪の碑」）。季刊「悲劇喜劇」（第 2 次、早川書房）刊行。17 日の「西日本新聞」が「月に 10 万冊発行 九州にも 40 の出版社」という見出しのもと、「終戦以来言論の自由が確保され出版事業は急激に復活し九州地方においても半年をまたずして四十余の出版社を数えるに至った。試みに各県別に出版社の数をみると福岡－二六、佐賀－四、長崎－一、熊本－八、鹿児島－一、宮崎－一、大分－二、山口－四、なおこれは出版協会の正会員のみであつて、その他を合せるとさらに多数のものになると思う。／どうしてこのように九州の出版界が盛況を呈することになったか、それについて最も大切な三つの原因がある。第一に用紙生産量の豊富、第二に執筆者の増加、第三は中央の印刷、製本能力の弱体化である。用紙の面では九州は北海道とともに我が国の二大生産地といわれ、福岡県小倉、熊本県八代および坂本にある王子製紙、宮崎県飫肥の日本パルプの四大工場をはじめ各地の中小工場で生産される紙の量は年産二千万封度に達し九州地方のならびに書籍、雑誌の最大消費量を賄ってなお余りあるものがある。／さらに印刷状態は、これまで九州地方は京浜、阪神につぐ高度の文化的諸施設を有しているといわれたが、印刷、製本の面においては殆ど全国的水準以下であった。しかし戦災により中央の印刷諸施設が多く被害を受けた結果、地方発注となり、さらに地元の出版活動の興隆につれて多くの刺激を与えられ、また技術的進歩を促されて相当の進歩をとげてきたものである。ことに福岡、熊本地方では能率の増進の結果としてハモノ印刷から出版印刷への移行が試みられつつある実情である。／昨年四月出版文化の向上に資する目的から業者のみによる九州出版連盟が結成され、また最近日本出版協会の九州支部が福岡市に設けられ活発な活動を開始している。そして雑誌の発行だけを見ても二十二年度（第三期）十月－十二月の用紙割当では六十七種が正当な配給によつて発行され、その量は四万四千六百封度、この中ではすでに中央誌として遜色なく全国的に読まれているものも多数ある。その種類は学術、政治、経済、文学、映画、婦人、児童、娯楽等々広範にわたっている。／九州の配給の現状は日配九州支店扱いの図書購入状況によつて見ても、本年十月の統計は地元九州出版物の仕入れが、書籍五万六千二百二十九冊、雑誌四万七千三百十七冊、計十万三千五百四十六冊、金額にして約三百万円、これだけの量が十月中に九州の出版社によつて発行されたということになる。九州以外から流れ込んでくる出版物は書籍二十六万冊、雑誌七十万冊、千二百万円余で以上は日配経由の数量のもののみとすれば、実際は相当の数となるであろうし、これだけの書籍、雑誌が、十月中に</p>

	全九州に配られたわけである。なお全国的に見て図書頒布の率は、九州十六パーセントという膨大な量を示している」（日本出版協会評議委員・大坪敏吉の談話より）というインタビュー記事を掲載。28日、東宝交響楽団、第1回定期演奏会（指揮・近衛秀麿）開催。
昭和22年11月	1日、NHK ラジオ放送がクイズ番組「二十の扉」放送開始。6～7日、鹿児島市第1回学生演劇コンクール。22～23日、福岡市新制中学教員組合主催芸能祭。アメリカ映画封切館だった日新映劇が閉館。若松の学生演劇団「鷗座」公演（演目は「廃きよ」）。30日、歌舞伎の上演禁止が解除され、「仮名手本忠臣蔵」の通し狂言が東京劇場で興行される。
昭和22年12月	15日、大牟田地区自立演劇協議会、第1回演劇コンクール。30日、池辺良主演の「春の饗宴」が封切られ、笠木シズ子の歌う主題歌「東京ブギウギ」が大ヒットとなる。この月、若松地区労労組協議会文化部主催、若松自立劇団公演（日立製作所「旗を守る者」、永田製作所「十三夜」、若松車輛「乞食と夢」、日本板ガラス二島工場「今年も亦」、甘草（日華）油脂「息子」）。福岡市の「協同座」が第1回公演（演目は「風雪の碑」）。タマヤ・シネマ洋画開場。東中洲の多門座が多門映劇として復興。占領軍が日本政府に「帝国」の文字使用禁止を命令。この年、用紙事情の悪化などにより、「文藝春秋」など雑誌に休刊が続出。扇情的な「カストリ雑誌」が氾濫する。スカートが流行。性病が蔓延し推定患者数40万人を数える。
昭和23年1月	2日、劇団民芸が初公演。演目は村山知義演出の「破戒」。28～29日、「福岡協同座」第1回都市公演（演目は「若い啄木」）。閉館した日新映劇が博多新演技座として開館。西口紫渥が「九州春秋」復刊。「九州演劇」が第14号をもって終刊。
昭和23年2月	4～6日、長谷川一夫一座、福岡市の新演技座のこけら落として公演（主催・福岡県連合保護会、同少年保護協会、後援・福岡高等、地方検察庁、同少年審判所、入場券は各校区婦人会プレイガイドで発売）。ただし、この公演の後、2月から同館は松竹映画の封切館となり、演劇と映画の掛け持ち劇場となる。この掛け持ち劇場は、その他に大博劇場、福岡劇場（新柳町）、多門座（東中洲）等があった。18日、東京・浅草公演で興行中の女優らが公然猥褻罪で逮捕される。28日、福岡県農産漁村文化協会が設立され小台三四郎らが「協同座」を専属劇団とする。

注1 棚町知彌・宮田繁幸・岩井真実・永井美和子「棚町知弥氏にきく——占領下の福岡博多を中心とする演劇検閲と地方演劇の状況——」（『歌舞伎 研究と批評』平成12年6月）のなかで棚町は、「……それからもちろん「九州文学」。ご存じのように、戦前から、火野葦平や「無法松の一生」の原作の「富島松五郎伝」（岩下俊作は八幡製鉄所の係長）なども掲載されました。「九州文学」に対して、戦後、新しい文芸雑誌が「午前」でして。それで「九州文学」の中の演劇に関心を持つ人が作ったのが「九州演劇」だな。「九州演劇」の中心は、福岡演劇人協会のメンバーで雨宮毅、この人は劇作家の右代表。演劇のスポンサーのいちばん大きなのは三帆書房。柳橋の三帆醤油というところに、えらい文学好きの社長がいて「九州展望」という雑誌をだしました（文学座をよんだりもしました）。筑摩書房が出した、臼井吉見の「展望」に呼応したのね。／その辺はみな九州とうたっているやろ。対して僕が出した「リドウ」という雑誌は、どこにも九州とはうたわなかったんや。大それたもんやな。あなたたちは『赤い靴』という、映画を観ている？ クライマックスシーンに「Le Rideau!」という、開幕の柵にあたる台詞があるんだ。そこからつけて「リドウ」。編集長・高山さんが描いた表紙に、左から右へ「リドウ」で書いてあるから、七掛けで販売を委託した本屋は「ウドン」と読んだんや」と述べている。

注2 昭和21年5月の「九州演劇」には九州演劇関係人名簿（氏名・生年・出身地又ハ経歴・所属・現住所）が掲載されている。以下、名簿の全文を紹介する。「ア 秋山六郎兵衛 明三五。東大独文。福高教授、九州文学作家。福岡市地行東町一番丁海岸二一三ノ六／雨宮毅 大六。日大。九州演劇編輯長、九州文学。劇作、演出。福岡市警固本町三三／青雨之助（中西政次郎）明四〇。東京抒情詩社。九州書房。劇作、演出。福岡市渡辺通四文化ハウス／青山みどり 大四。松竹少女歌劇。俳優。福岡市薬院相割町／イ 岩下俊作（八田秀吉）明三九。小倉工業。九州文学。作家。小倉市江南町一〇四〇／井上精三 明三六。西南学院。福岡放送局放送課長。福岡市古小島旧電停前／石田豊 大九。明大。福岡放送局。放送。福岡市南高宮四六九 岡部方／生田徳兵衛 生田組。博多二輪加。福岡市材木町五／今田実 明四一。鎌倉中学。新邦劇団。俳優。福岡市東当仁町海岸通五／伊吹夜詩夫 大二。福岡夜中。劇団新世紀。俳優。福岡市春吉三番町七七二〇／井島謙介 明三七。松竹新生歌劇団。劇団西ニッポン人事主任。福岡市箱崎汐井町七／五十嵐権九郎 明三九。吉本興行。福岡芸能劇団。俳優。福岡市南新地一ノ六／伊藤稔子（布左子）大一。京城淑明女専。福岡放送劇団。放送。福岡県宗像郡河東村野添 伊藤方／ウ 内田庸 明四一。松竹助監督。庶民劇場。佐賀県神崎町四丁目／梅林良一 梅林良一座。俳優／エ 江味三郎 江味三郎一座。俳優。戸畑市千防町／恵良八重子 大一三。石井漢舞踊研究所。福岡劇場舞踊団。振付。福岡市新柳町福岡劇場内／オ 大内田圭弥（三郎）大一〇。博中。九州演劇編輯、庶民劇場。劇作、演出。福岡市上赤坂五 麻生方／大谷尚之（利

彦) 大八。九大法文。九州演劇編輯、庶民劇場。劇作、演出。福岡市姪浜天磨町四ノ組／大内重四郎 大八。吉本興行。新邦劇団。俳優。福岡市南新地一ノ六／大矢雅子 大一。川丈劇団。新邦劇団。俳優。福岡市東当仁町海岸通五組／大山泰子 大一〇。ムーランルージュ。劇団青春地帯。俳優。福岡市住吉新屋一七二五 坪井方／岡道郎 大七。ムーランルージュ。フリー。俳優歌手／カ 河原重巳 明三四。庶民劇場。演出。若松市浜五北四／寒水多久茂(勝茂) 大六。石井漠舞踊研究所。福岡劇場舞踊団。振付構成。福岡市新柳町福岡劇場内／川崎卯之助 明三六。東亜キネマ。大映九州配給本部。演技。福岡市西公園立帰天満宮前／春日新九郎 春日新九郎一座。福岡県遠賀郡折尾町折尾劇団 野村方／海東義児 大七。エリアナパブロパロシヤンバレエ研究所。劇団青春地帯。俳優、舞踊。福岡市住吉新屋一七二五 坪井方／川口勝子 大八。黒瀬舞踊研究会。舞踊教師。福岡市春吉三軒屋五一六。／キ 菊田信 大四。森川信一座。劇団新世紀。俳優。福岡市春吉三番町七七二〇 伊吹方／木村寿美 大一三。宝塚少女歌劇団。西日本芸術研究所。俳優、舞踊。福岡市東住吉一五四。／ク 黒木憲三(猛) 明三二。ムーランルージュ。福岡花月劇団。俳優。福岡市春吉新屋二七六／ケ 毛屋平吉 明二七。東京音楽学校。福岡放送管弦楽団。音楽指揮。福岡市飛石町一ノ一五／コ 今史朗(金四郎) 明三七。山田耕作門下。福岡市花月劇団。作曲。福岡市渡辺通四丁目文化ハウス。／小宮謙次(両角譲) 明三七。芸術小劇場。福岡花月劇団俳優。福岡市当仁町一四／サ 坂本光政 大三。京城工業。朝日新聞文化部。評論。福岡市天神町一七朝日新聞支局内／佐城青児 明四二。吉本興行劇団青春地帯。舞踊振付。福岡市住吉新屋一七二五／佐藤博 大一〇。京城放送劇団。福岡放送劇団。放送劇。福岡市天満町二牛島方／佐々木雅子 大元。大都映画新邦劇団。俳優。福岡市管絃町 白水方／桜喜代美 大一二。宝塚少女歌劇。劇団西ニッポン。俳優、舞踊。福岡市箱崎汐井浜 劇団西ニッポン方／シ 進藤誠一 明三一。東大法京大仏。九大法文教授。評論。福岡市三宅西大橋町／進仁 明四二。日大。福岡放送劇団。劇作、演出。福岡県丁県政記者室内／霜川遠志 大五。日大。熊本芸座。劇作、演出。熊本市新掘町三／神保栄 明三〇。慶大政経。福岡興行協会長。芸能。福岡市浄水通三四／清水洋子 大一。栗島すみ子門下。福岡市花月劇団。舞踊、俳優。福岡市大浜二丁目新町。／ス 須田村桃太郎 明四五。古川ロツパー座。フリー。俳優。福岡市春吉七番町 春吉アパート／セ 設楽敏雄 明四三。慶大仏文学。毎日新聞文化部。評論。福岡市東中洲玉屋二階毎日新聞支局内／タ 田尻繁 大六。東実助監督庶民劇場。演出。福岡市西通町一一五 井上方／田岡鎮男 大五。シナリオ十人会。希望新聞編輯。劇作。福岡市飯倉町一七七／谷川歳男 大三。福中。九州演劇囃託。独立美術会。洋画。福岡市春吉八番町／館山豊美 明四二。吉本興行劇団西ニッポン主宰。芸能音楽。福岡市箱崎汐井浜一〇一／高辻義太 明三二。福岡師範。福岡芸能劇団代表。芸能。福岡市警固本町四九六／玉川成太郎 玉川成太郎一座。俳優。飯塚市西町吾妻座内／田中淳一 大一〇。八代中。劇団新世紀。俳優。福岡市春吉七番町四組／田村和枝 大一。前進座研究所。福岡か月劇団。俳優。福岡市住吉横田町四組花月寮／ツ 佃一 明三五。神田アテネフランセ。西日本新聞社月刊西日本編輯長。芸能。福岡県筑紫郡南畑村南面里／筑紫純子 昭二。宝塚音楽学校。熊本芸座。俳優。熊本市新掘町三熊本芸座内／ト 轟早苗 大一一。吉本興行福岡芸能劇団。俳優。福岡市南新地／ナ 中野節朗 明三五。大分中。夕刊フクニチ編輯長。評論、芸能。福岡市桜木町五二／中島守 明四二。福岡化学燃料常務取締役。九州演劇社社長。芸能。福岡市警固本通一ノ一七／長尾長太夫 明三七。福岡川丈劇団主宰。フリー。芸能。福岡県糸島郡北崎村西浦／中村新 大六。東宝文芸課。福岡放送劇団。劇作。福岡県嘉穂郡幸袋町大字中九五二／南條隆 南條隆一座。俳優。久留米市小頭町恵比寿座内／長井猛 明三九。東京新派新邦劇団。俳優。福岡県宗像郡宮地嶽／中野俊子 明四五。京城放送劇団。福岡放送劇団。放送劇。福岡県今津町浜崎七八／中村団十郎 中村団十郎一座。俳優／ニ 西口紫溟(進郷) 明二九。福岡花月劇団社長。芸能、制作。福岡市春吉八番町四五八／西村正人 大五。西村正人と其の楽団。俳優。久留米市／ハ 長谷健 明三七。福師範。九州文学。作家。福岡県山門郡東宮永村下宮永／原田種夫 明三四。法大。庶民劇場、九州文学。詩、小説。福岡市春吉花園一六六五／阪東多門 阪東多門一座。俳優。福岡市東中洲一ノ六／博多淡海 博多淡海一座。博多二輪加。福岡市下宮崎町九四四／間君代 明三六。石井漠舞踊研究所。劇団新世紀。俳優。福岡市北当仁町八組／萬代恵利 大一二。東宝梅田舞踊隊。劇団青春地帯。俳優。舞踊。福岡市薬院相割町 緒方方／花村美子 大八。東宝演劇部。マンハッタンリズムボーイズ。俳優、歌手。福岡市岩田屋東宝本社演劇課／ヒ 火野葦平(玉井勝則) 明四〇。早大。庶民劇場、九州文学。作家。福岡市渡辺通四 文化ハウス／東潤 明三六。下関商。庶民劇場、九州書房。詩。福岡市渡辺通四 文化ハウス／平田汲月 明三〇。汲月会。二輪加作者。福岡市上人参町一六五／樋口次郎 樋口次郎一座。俳優。福岡県宮田町大字磯光四二六原口方／フ 古海卓二 明二七。映画監督。庶民劇場、九州書房。演出、評論。福岡市曙町二ノ四三／古川健次 明三六。専修大。福岡新世紀文芸部。劇作、演出。福岡市北当仁町八組／伏見五郎 大四。東宝梅田共榮座。劇団西ニッポン。俳優。福岡市箱崎汐井浜劇団西ニッポン内／ホ 星野順一 明三八。洋画研究所。浪漫詩社、庶民劇場。演出。若松市五反町一丁目／マ 前川繁尚(作太郎) 明四〇。石井漠門下。西日本芸術研究所。舞踊教師。福岡市上魚町一三。／丸山八重子 大一二。福岡女専文科。九州演劇編輯部。演劇。福岡市本庄町天神通九／前田淑 大一〇。福岡女専文科。福岡放送劇団。放送劇。福岡県筑紫那珂川町大字竹下／ミ 水上圭次郎 大九。日大。東宝九州支社。芸能。福岡市葦島平田町／宮城英一 明三五。吉本興行宮城千鶴子と其の楽団主宰。芸能。福岡市箱崎宮前町／三河家桃太郎 三河家桃太郎一党。俳優。田川市後藤寺町丸山劇場内／三浦八郎 大七。榎本健一座。三浦八郎と其の楽劇団。俳優。福岡市北当仁町八組／三宅周一 明四四。東宝演技部。マンハッタンリズムボーイズ。俳優。演出。福岡市岩田屋東宝演劇課内／宮城千鶴子 昭二。吉本興行宮城千鶴子と其の楽団。歌謡物語。歌手。福岡市箱崎宮前町／水保早苗 大一三。川丈劇団。フリー。俳優。福岡市北当仁町八組／ム 村越健介 大三。帝国美校。劇団文芸座。演技。熊本市新掘町三熊本芸座内／モ 望月孝丸 明三五。ムーランルージュ装置部。庶民劇場福岡美術部長。舞台装置。福岡市住吉新屋町一七四七／森川丈市明三八。明大政経。夕刊新九州総局長。評論。福岡市東中洲玉屋毎日新聞社内／毛利九波 明四一。川丈劇団。フリー。俳優。福岡市北当仁町八組／森鈴子 明四五。吉本興行劇団西ニッポン。舞踊、俳優。福岡市箱崎汐井浜一〇一／ヤ 矢野朗 明三九。豊国中。九州文学社。作家。福岡市雁林町七／山路貞三 明四一。大阪外語仏文学。毎日新聞福岡総局長。評論。福岡市東中洲玉屋毎日新聞社内／安西均 明四四。八雲編輯部。朝日新聞文化部。文化評論。福岡市天神町岩田屋九州タイムズ社内／ユ 弓矢八方 明三六。川丈劇団。劇団新世紀。俳優。福岡市養父町一四／ヨ 代木徹平(安田秀雄) 明四四。日大。福岡放送劇団。劇作、演出。戸畑市東天籟寺／吉田春一郎 明四三。東京商大。熊本中央放送局福岡駐在。放送。福岡市薬院露切町 真鍋方／吉田進 大六。コロムビアリズムボーイズ。福岡花月劇団。歌手、俳優。福岡市住吉横田町四組／吉武暉芳 明三六。東宝映画九州支社。理研科学映画九州支社長。映画演芸配給。福岡市春吉新屋二七六／リ 劉寒吉(浜田隆一) 明三九。小倉商業。九州文学。作家。小倉市魚町三三 浜田屋／若葉香司 新文芸座。俳優。福岡県鞍手郡宮田町日ノ出新町四八八二。

また、「九州演劇」の広告に登場する劇団・映画館は以下の通りである。「○明治座（一流映画常設館） 久留米市明治通り 赤星徳樹（九州地方商工局石炭部委嘱移動映写班九州文化企業社）、○宮城千鶴子と其の楽団（歌謡物語、唄と踊り）事務所・福岡市箱崎宮前町・宮城興行社、○新興芸能楽劇団（歌とおどりと軽演劇）高空興行社・福岡市警固町四九六、代表・高空義太、○劇団新世紀（笑ひと音楽、軽演劇）スタッフ／伊吹ヨシヲ、菊田信、田中淳一 中村とみ子、芦辺みどり、吉島静子、伊那マリ子、飯田嘉久子 間君代、弓矢八万（他二十余名）○福岡花月劇団 黒木憲三、小宮譲次、吉田進、須田村桃太郎、佐土島茂、草場十四雄、道地貞造、春木秀雄、三枝紫朗、中村政行、香椎三平 田村和枝、清水洋子、井山君恵、今愛子、潮見麗子、朝倉あけみ、美根たき子、春野かよ子、田牧真砂、美川けい子、大西えみ子、羽衣みち子、東京子、黒瀬千佐江、月代あきら、今史朗、北沢勝二、宮崎見吉、植木豊、久保田清英、森藤知之、内田美義、春日宗陽、春日壽美、梅屋福次郎、本田次郎、○帝国医薬研究所専属・西ニッポン楽劇団、○はぶ楽劇団 事務所（福岡市箱崎汐井町）、○新邦楽劇団（笑ひの王座）今田実、長井猛、大内重四郎 佐々木雅子、伏見松子、大矢雅子、○雲井淳と楽園セブンスター、○西日本映画劇場（映画館）福岡市天神町 28、○共楽亭（講談・落語の寄席）、博多水茶屋（元水券跡）、東京より直演、出演者 10 日目替り、芸題毎日替り、○松旭斎天星一座（スライド・ハンド・マジック）福岡市下練堀町 335（アメリカ赤十字社、福岡レインボークラブ専属芸芸団）、自転車曲芸、アクロバット、足芸、タップダンス、ジャグラー等、○九州芸術社所属「城山少女舞踊歌劇団」（小柳美代子、小柳恵美子、小柳美知子、小柳スエ子、富原千恵子、済家信子、鍋山敏子、松吉ハトム、樋口美智子）、○浅草富丸と楽団鈴蘭、代表者は倉富金市（八幡市清水町 2 丁目）、○春日原劇場（社長・浜原栄、支配人・宗野保）、○ニユースウイングシヨウ（事務所・福岡市東福岡五ノ組 第一芸能配給社 武智清）芦辺みどり、並木待子、青木緑、斎藤伸、田代浩三、その他、○多門座（阪東多門、博多東中洲）、○西日本演芸社（下関市新地町・新富座 門司・稲荷座）、○人気王・南条隆とその一党（新演劇）、○新星楽劇団（笑ひとベースの交響曲・黒木憲三、今田実、新井信一）、○ワカバ・コージ（新文芸座・事務所は大部分別府市飛川埋立地 288 ノ 4）、○理研（国際文化ニュース、理研文化映画、娯楽短篇）理研映画株式会社九州支部（福岡市片土居町平和ビル 3 階）、○歌ふ喜劇座（楽団喜望峰 福岡市春吉三軒屋、代表・川口博美）出演者・菊田信、樺弘二、三木隆夫、黒瀬千里、深水晴夫、姪野道博、伊那まり子、夕月たへ子、長谷川アユノ、静川京子、羽衣好子、田畑秋子、中村粧子、○九州剣戟界のホープ・さくら劇団（さくら富士子、春日新九郎、さくら劇団出演部・大部分宇佐郡柳ヶ浦町、事務所・八幡市折尾町折尾劇場内）、○楽劇団ニッポン・アサヒ（馬場興行部・福岡市箱崎町）、○鈴木太郎 愉快劇（演出協力・須田村桃太郎協力出演、福岡市東中洲多門座内・西本芸能社）、○再建座（お芝居と歌と踊りの豪華版「森雄二郎と其の一党」、事務所・福岡市千代町電車交叉点角 花沢章と其の楽団）、○新舞踊教室萩野舞踊研究所（福岡市住吉西本町〔箕島橋袂〕木塚萩野）、○阪東立花一党（演出／花形女優・月波星風、事務所／俳優志願申込所・福岡市馬出御所之内一ノ三組 金子繁方）、玉川百々若・橘喜久枝、筑波龍太郎・花柳徳水、三門礼三郎・花柳美智子、河上伸哉・桜木八重子、○西日本芸術研究会直轄、西日本芸術研究会（福岡市住吉新屋 1724 番地）演劇部、舞踊部〔洋舞科、日舞科〕、声楽部、器楽部、○福岡・くるみ座、○八幡・にんじん座、○小倉・九州宝塚（終戦直後）」。

注 3 『博多・劇場 50 年のあゆみ』（福岡市興行協会、昭和 47 年 8 月）は、敗戦直後の福岡における特筆すべき事柄として三帆書房の誕生と西鉄文化会の発足をあげ、「箕島の三帆醤油の御曹司、宮崎宣久が三帆書房を起し、大西巨人、牟田口一郎と企画、編集の「文化展望」という文化総合誌をはじめたことだ。出版事情が低調な時なので、五月から発行、九月に五万部も売れた。タブ 24 ページ、表紙は三岸節子が描き、東京のベテラン作家を動員して書かせた。これは約二年つづいている。これとならんで宮崎は、田岡鎮男、占部博と「映画展望」を十月に出したが大へんフレッシュな編集だった。東京の一流どころが毎号執筆したけれど二ケ年ぐらいい潰えた。その創刊号（十月）に載った伊丹万作の「古いノート、新しいノート」は絶筆となった。伊丹は九月二十一日に亡くなった。そこで、「映画展望」三号は、伊丹の追悼号で、万作の遺稿「木綿太平記」をのせた。又、宮崎は演劇活動めざましく、演劇に情熱を傾けている。三帆書房主催で招いたものをあげると、22 年 7 月 文学座。久保田万太郎演出、森本薫作「女の一生」／22 年 8 月 空気座。田村泰次郎作、小沢不二夫脚色「肉体の門」／22 年 10 月新協劇団。モリエール作・村山知義演出「タルチェフ」（九州巡演）／22 年某月 パラ座。菊田一夫作、佐々木孝丸演出「墮胎医」 敗戦後の混沌とした福博の文化のため貢献した人として宮崎宣久の名は忘れがたい。も一つ、敗戦の瓦礫の中に突如として現われ、まぼろしのように消え去った「西鉄文化会」の功績は大きい。西鉄の社長であった森久俊治をはじめ幹部クラスの人たちが皆会員となり、昭和二十一年十一月九日、「西鉄文化会」が誕生した。それは、瓦礫の町と化した福博の混沌の中に挺身して文化のレベル・アップすることがこの会の使命であった。年間 10 万円という活動資金が出た。当時、九州地方工場文化連盟という毎日新聞をバックの会があり、これは勤労意欲の高揚、生産復興を意図した会で理事長に安川寛がいた。「西鉄文化会」は右の文化連盟と結び、各会社の内部にある職場演劇コンクールを後援したり、岩田屋で独立展を開くかと思えば、三帆書房と組んで日響室内楽団を始めて九州に招いたり、又、劇団を招いたり、ヴァイオリンの諏訪根自子やピアノの原智恵子の独演会を開いたりした」と述べている。